

東田五代記初編卷之上

初一回田家の家京附軍功謀略

爲も美名を海内に流るるたる真田三代の家京といふ清和の末流海野小太郎幸氏の後胤真田正忠幸隆の二男安房守昌幸の次男小右衛門尉幸村の嫡男大助幸安なり此三代の英

に容分となりてこゝに苗字を真田と改む然るに清光より十七代武田伊豆守信盛の嫡子太郎信昌三歳のとき父卒去して家老後部上野助後見あり信昌十五歳に至らば武田の家督を續せんと約せしに信昌十五になると雖も上野助これをわささきよつて武田の家臣小幡今福飯富原真田等後部の居城石澤におしよせたるが就中真田次郎三郎幸茂上野助を射殺して武田家相續に及ばれたる此時主君信昌さかた幸茂に左文字の大刀を褒賞せらる信州佐久郡岩をの城代にぞせられたり猶信昌の命せによりて曲淵庄左衛門が娘を幸茂に嫁せしめて徳玉丸を産めり是則ち真田正忠幸隆を〇武田信昌廿五にて卒し二男竹王十三歳にて武田家をついで信綱とあ

は松壽丸相續して左京太夫信虎といふこの大將暴戻あして家族を殺すと一ばく就中武田の一族加々見四郎益時を攻るに及んで眞田幸茂はとく主人信虎の殘忍を悪んで自身病氣と稱して嫡子幸隆二男幸綱穴山いせ崎等の臣下に三百人を付て々々み改の加勢とせり頃は永正十六年三月下旬加々美の城お寄て小熊谷お陣とるところ智謀に長たる眞田兄弟城兵さぶんで夜うちせんとそが準備にぞ及びける

○第二回幸隆謀つて相木盛之助を復臣とんと話

眞田かこかるに秋毫違はず城兵相木盛之助日野源兵衛落合彌次べる等夜うちしけれど眞田の三百三手にわかりてか美が隊伍の裏を撃ちけるふよ城兵大いに敗北せり信明日の城攻に武田の隊將小畝入道眞田に功を奪われんとを嫉みて眞田を後陣に引せたり城兵たゆまずうつて出勇を振てたかひげれば奇手の打死多くして遂に敗軍に及びける後陣の眞田兄弟徐々と後殿して小熊谷まで退きしに此にも英氣を露顯たる信虎この注進を聞と等しく大いに怒つて自ら三百五十余人を随從て押よせ來りて眞黒にあつて攻たまり城兵嚴しく防ぐといへども埋草を抜かけく多田三八あゝの城の一番乗とれば原大隅の駄卒第十兵衛門を破つて諸勢を城内へ引入れければ遂に落城に及びける此相木盛之助主人益時を諫めてかとまやり城に火をかけて直ちに大長刀をふちふり奇手の中へ斬て出たり然るほどに眞田幸隆は今日第十兵衛が

表門を破りたる大力に感じわを彼十兵衛を臣にせんと密に望みを起したるのく満城の焰火くわつたるその中より相木森之助うつて出奇手を入さまで斬落すその勇猛現に万夫と當といひつべ幸隆これを屹と見て此勇士を生捕てわが股脰にせばやと思ふば幸か眞先にうつて出相木まわり合て戦ひまが偽り負て逃出すのがさかま追かきさる眞田の駄卒草尾長藏相木が馬の足をなぐれば森之助馬上にたまりず落るところを眞田は老臣穴山小左衛門いせ崎五郎兵衛折重ありて生捕けるかくて幸隆が仁義のとばにもりの助感服してつひに眞實の臣下とぞある○信虎のいみ城をせめ陥して歸陣ける時に眞田幸茂は老病身にせまりておみるか幸隆が才能を誠まの永正十六年八月廿六日六十九才にて岩尾城に病死せり義樹大禰定門と法号せり幸隆はちの家とくつぎよくそが臣下を恵むにぞ穴山いせ崎、別府治部左衛門、遠山又六近藤登之助、西井屯、相木なんどをこじり一記書千の勇士その主をたすけて道を守り民を撫育し難と救ひ善を行ふによつて有斯戦國といふも岩尾の四民の泰平をたれまみける○爰に信州の大將平賀修理助成頼は年來武田と牟盾ありしが這回加賀美滅亡をき、大お怒つて選兵一千五百余騎を率いて若御子をうち越駒井まで出張す武田信虎些ども猶豫す五千の勢にてかし出し堀川を前陣とつて戦かたり武田の勇臣多田三八を始め馬場ら守板垣、原、小幡ら烈しく働らさ事に平賀せいを突くつ十丁バウリ追捲る時に平賀の

陣中より刃の徑り二尺余の大身の鎗とふり由井市兵衛と名り引かへして武田をうち惱ませ、三枝條左衛門を始め十余丁をうちとけ、徐々退き其奮勇いとめさす。是や後年大坂城にて幸村が四十八將のうち山利鎌之助が父なり、叔信虎の平賀を一戦に破り甲府へ

○第三回 武田真田拜任 属信州成瀬川奇謀

爰に人皇百四代後土御門帝崩御、ましくして後柏原帝御即位ある諸國の大小名祝賀を奉つる中に、武田信虎は真田幸隆をもつて上京なす。まめ沙汰五千兩、巻物百本、甲州絹二百反を献せり。報として信虎を従五位上左衛門尉に任し、使者幸隆を彈正忠にささげけり。○今川義元、旗本高天神の城主、福島上總介は武田信虎の悪行を惡み、甲州におき寄せ、戦争最中へ幸たか歸國す時に、信虎軍立を幸隆に問われれば、和睦を申入て敵を油断させ打べしとおし。信虎はこれを用ひてくもなき軍勝利を大將、福島上總介、山形、森、路守二將とも、真田の手により捉たり。信虎歸城、その日勝千代出生、この見いそむとち武田晴信入道信をあり十三才のとき、父信虎に鬼鹿毛の馬を乞ふに與へず、あれより父の不興をうけて岩尾に到り、幸隆に身をよせたり。か幸のねんごろに意見ありし信虎の歸依僧春巴和尚を頼んで和睦を求め、父の許にうゑりまうとも、幸隆のをしへに、隨ひ白痴のく如、舉止ひけり勝千代元服あつて、太郎晴信と申す。○天文五年十二月廿七日、海野口のいんがりに大將晴信に従て幸たのの弟海野の四郎幸綱より、ちして平賀入道源心へ、整理助成頼を

うちとり四郎の臣望月鉄之助、鉄炮にく源心のつまゝら絹をうち取て、此軍大勝利をえたり。○信虎の臣に今井空之介貞國といふもの、白山といふ猿の爲に傷つけられて、此猿を殺すによつて、貞國切腹申付らるその子彌四郎三才なりしを、貞國の臣布下文吉ひろかに抱いて岩尾にいたり、幸隆に救ひと乞ふ。この彌四郎のちに布下貞家と名のる難波戦に、入道して鉄山と号して、庚申堂にてうち死せり。○幸隆の妻は飯富玄番の娘ありしが、懷妊して男子を婉む。是を徳太郎と号け、後に源太左衛門信綱といふ。○海野四郎幸つな病死し、子あきをもつて、穴山小左衛門の嫡子海野の家系をつかせ、難波戦のとき、四十八將の一人海野六郎兵衛の父あり。○爰に武田晴信の父を駿府の今川義元の許へあざむき送りて、みづから武田の家督に岩尾の城主、真田幸たかこを聞て、大いに嘆息。いかに悪人なればとて、子とて父を廢する道なき。噫、この君にして武田の家は、七ふへしとて、已後病氣と稱して出仕せき。○信州高尾の城主村上義清は、晴信が父をおひ出し、酒食お荒むと聞て、さらば甲州を攻へしその手始めに、岩尾城の真田を攻撃んと、金山隠岐守に千七百の勢を附屬て、成瀬川まで押寄せさる。真田幸たかこれを開て、これに抗敵せよと軍配をあそ、且相木森之助に百五十人を附屬、ままを授け、出軍せしむ。又別府治部右衛門も百五十人を授け、策をさづけて出幸。さかはいせ、晴望月根づを、一たがへ二百余人にておし出、謀じ合せ、一暗号を待時に村上せい、金山の先陣、矢野いづの守は、真だせいのふいを打んと押よする。真だせ

いはふいを打れて亂走といづの守こきを追ふて五丁ばかり進むを見て金山もついで押出  
成瀬川へ打入るを拒ぶとやしうりけん一砲ひくど等しく村上せいの際所一時に焔燃上るに  
驚ら矢野金山の勢引返さんとするを見て相木の軍せい盛かゝるせは後より穴山海のが鉄炮う  
ち掛沸騰して一卒もれがそまじと狭うちらにといづの守打死して金山おきの守もいと危かり  
しが従兵多く打れてやうく陣所に引かへして見ればはやいつか真だがたのいせ崎根津ら金  
山の陣を乗どつて備へたるお金山の將卒狼狽まの逃んどそれば横合より別府治部右衛門切  
て出金山せいを塵まにそる大將はふくにびのびく更科にこそ入りける幸隆の凱歌を唱  
へて岩尾城に歸陣せしと智勇鬼神とも驚感せしむ

○第四回山本勘助の親説をいれく再度晴信を補弼し屬信州攻眞田智計

愛に三州牛窪より出たる山本勘助あるもの武田晴信の請によつて甲府に軍師となり就  
て直ちに眞田幸隆を用ひとを嘆息て大いた晴信をいさめ勘助みづの岩尾にいさり君さうら  
ずとも臣たるの道を説てついに幸隆を甲府に再任せしむ幸たか従來晴信に背くにあらせそ  
の非道を撓直さんがためなりま夫より幸たか晴信に對面せしわわれ今は劉玄德伏龍鳳巢を  
得たるに勝れりと大悦まける○先づ加々美益時を攻たるとき大いに戦功を立たる寛十兵衛  
虎秀と比賣なさを恨み竟にはら大隅が妻の弟正木藤馬を殺して岩尾城に入て幸たかの臣とな

るその先幸たりかどうゆめに寛十兵衛を家臣になさく念ひしが果してそのいを遂るの智謀  
のいさどころにぞわりける○天文十三年の冬信州笛吹峠の北小室に隣る尾臺の城主又三郎  
信隆弟治郎左衛門蔭利を眞田一てにしうちとり次に諏訪頼茂をゆるばさんとそきが旗下あ  
る六家はつらんと幸隆の家臣根津左兵衛青木喜市三好權藏の流言の策を口屬諏訪の六家を感  
いさんとそ此六家の室賀入道田達九子三右衛門矢澤修理大夫根津官右衛門武者民部助小泉又  
市あり眞田の三臣諸方に到りて流言とらく室賀等の六家のその家を滅亡し武田家に降参す  
るなりと云觸らそをその頼茂聞て愚にもちちまら起惑ま六家と賺ま呼で殺さんと計る六家こ  
れを聞今は是非あしとして眞田武田家に降参そ之において再たび謀つて諏訪頼茂を誑かり呼  
で殺さんと晴信使者をそのに遣ひし和睦なさむ頼茂大いに悦び春禮とまてみづから甲府に  
來りしを能狂言に響應にと寄せ頼茂うち取るとの家全く滅亡せり○小笠原長時木曾義昌敗軍  
せしときひとり伊奈新九郎のみ鎖々然つて退くを甲將板垣信形これを追ふ幸たか制止これり  
捨奸の策なり追ふべからずといふ容かず長退し夜ふ入つて忽ち奸の伏勢八方より起つて板  
垣はどろい危おかりまを眞だ相木を遣つて板垣を救ひいぬ○天文十五年村上義清の剛將  
に薬師寺清光といふものわりこまを打捕せんば義清滅びすとて眞だ幸たか謀つて家臣須野見  
若狭守おとうと宗左衛門二人を荷持合苦肉の計謀を構へすのみ兄弟をよ一清に降らせ兄弟幸

たかど恨むと言込強兵二三百を貸賜り、幸のをうちとるべしとすにぞ義清これを實とし、  
しと藥師寺清光清の次清を大將とし、遣ひしを岩尾城の三の曲輪を引入を出口を賢めて藥  
師寺をはじめ一人も餘さず、塵しにせりこゝに至つて義清命を接應となして憤怒あり樂岩寺  
右馬之助佐栗三河之助に遣兵五百を授けて再び岩尾にむりいせけるが謀り設けし眞だ  
軍器、眞十兵衛の保田多兵衛増田新藏をうち捕り相本森之助の鐘が峯に密手を誑引て樂岩寺  
佐栗とはじめ一千五百を焼殺せしとぞ斯て村上義清の上田原の合戦にうち負け辛くも深山幽  
谷を走つて越後に入り長尾かけ虎を頼み敗軍の恥辱を雪がんとせり是によつて長尾景虎六千  
余騎にて信州海野原に出張し一軍したりしが深く戦かはず退くところを眞田幸たか景虎  
の歸路に埋伏し瓶割嶺にいさく支障て砲撃せし中づく眞田源太左衛門信つない享年積りく十  
六才善く戦かふ阿保宗左衛門を打ち捕たるさゝもの景とら眞だのために粉灰みちんと惱や  
れて春日山にぞ退入りける○天文二十年二月幸隆雄髪しく一徳齋と号し○翌二十一年の眞だ  
の三男吉兵衛昌幸享年十四才にて越後國新屋原に城を攻墮し大將太田持定坂井本馬の三將を  
打たる褒賞とまで雙房守になされ感状を賜はる○爰にまた武田晴信木曾より昌を攻撃んと原  
隼人を先陣として難所險阻の路を厭ひて大軍をもつて押寄る此時眞だの主従の搦手より眞  
んとして絶壁峻崖の道なれとてを攀登りて走下り相木穴山いせ崎あんど難なく一の曲輪を

乗り取りたる爰に城將伊奈九郎兵衛九尺バカとの鉄の棒にて眞田の三男安房守昌幸にわた  
り合ひ秘術を尽して戦ひ、昌幸計つて逃るさまなし砂筒と火繩なしの鉄砲にて伊奈九郎兵  
衛をうち捉たりこれを見て武田の惣勢大手より一同にせめ入りまかバ木曾の將卒打るもの  
員を知らず大將より昌今の最期の一戦して潔白く打戦せんと城門開いてうつく出こゝを専途  
と進撃しつゝ密手をうつと二十余騎敵とるものもなきを見て手勢を纏めて徐々ど引入りて切  
服せんと用意なす時に安房守昌幸の兄の信つな昌輝に向ふていふやう今日木曾殿のはさく  
敷一戦の最期の思ひ出と相見へ候ともくわが遠祖海野小太郎幸氏の清和天皇第三の皇子四  
品刑部卿貞元親王七代の孫にして既に帯刀先生義賢の嫡子義仲の臣下なりまれば君臣の親  
好わり斯るよゝとのありながら今眼前に見殺しにせんとわれくが本意あらず願ひくの主君  
信玄と義昌と和睦あさゝめ兩家相續のたどけとせん何奈をやとすされけれの信綱聞て大い  
よ悦ひまことに昌幸の説とてこの國家の爲の妙論なりわれくいさやあつかひんとて穴山入道源  
覺が三男小助本年十五才ありけるを使者として城中を遣ひしける扱もこの時城將木曾  
義昌生害せんとて長臣今井とるかの守兼祐大庭空之進手塚主馬をはじめ累代重恩に老臣七十  
三人を左右に列ね今ぞ最期と見危きところ穴山小助通して大面なし和睦を言入けれの徹  
魚の水を得たる心地し悦ふと限りあり此うへの眞田兄弟によろしく料理ひたまはるべしとあ

りけるにぞ小切歸りて斯と報すよつて昌幸信玄に言上まで竟お和睦にぞ及びける木曾よし昌  
安房守迄この報送として長臣大庭空之進の息女おたさの前といへる美女を安房守へ贈られけ  
る此女のそなはち眞田伊豆守同左衛門佐の母なりとぞ○小田原の城主北條氏泰武田家へ使者  
をゆかはし長野まきの守を諜伐して上州を手に入るまへと云送る驚見兵部もこそとよ一  
として信玄にとめけるみぞ信玄かのガ心にかあへい喜び驕むと一徳齊これを諜めくすそや  
う氏素の親好あれども姦猾無道の大將あきの決しく上州へせめ入ると無用なり只一國の長  
尾謙信を手に余りながら國を越て上州に出軍すると以ての外は無謀にこそと練むれども信  
玄をかきされども臣家の役なりとて再三強て諜めけるに信玄怒つて一徳齊を斬らんとぞ諸  
將ひたぞら信玄を止む眞田の太いに嘲笑ふて遂に信つち昌輝昌幸の三子をつれて居城岩尾に  
ぞ退そさけるこの時山本勘助入道々鬼齋は病中ながらこそを聞て大いあおろさ即日に出仕  
して信玄を大いに諜めけれども其ぞら用ひず竟に上州へ出陣せしかと眞田が明察に些ともた  
かはず北條の策におち入て大いに敗軍してはふくの体にて備州くらまで引退ぞさ川中嶋に  
掛らんとすればいつかの長尾の越後せい前路をひしと取りつて上州せいと諸共に挟み攻にる  
あさんどしける此に至つて信玄には一徳齊か諜言を用ひざりて後悔まてその智の深さに感  
服しける

○第五回 一徳齊長尾謙信を破るならびに眞田兩度戦功

さく信玄の川中嶋まで來るとさ長尾謙信前路を塞ぎはさみ打ちにあさんとす武田の謀卒今  
のかる、道みければ戦死とするの外ない一と越後せいに斬込んだり名に負ふ長尾の勇將狂卒よ  
く謀めよく戦かへば甲軍こにも敗北して惣くつれになりけるとさ六丈鏡の旗を眞先にお  
し立幾千とも見譯のたき諸軍せい廣瀬の渡へを遮りたるにぞ謙信これを屹度見てアレク  
眞田かいのの間にかり後路に廻して歸路を断ると覺へたり越後路と塞がれてこの軍は難  
なるぞとせば退ぞけやと遮たゞく下知あして倉卒としてひさまりぞく其と見るより眞田の勇  
將 算十兵衛虎秀眞さきお謙信を追かけるともつとも急なりその隙咫尺に至るとさ江藤左  
衛門かけ隔て、算にわゆる固より無双の勇將あれいたゞ一と奪お藤左衛門を斬て墜し更に進  
んと柿崎和泉守が二百余人をきり崩すまれば時眞田昌幸の程間よりと視ひをまして切て放らし  
鉄炮とかの砂筒ありけるが視ひ違はず謙信を川中へうら移とこそよと驚も奮激して越後せい  
を追かけおは大將謙信をも打取るべきに後路と断さられんとを備れて眞田勢はこれより徐々  
とひれ退さぬ○此後謙信ふりく思慮して信玄へ和睦をいひ入る筑摩川に對面に及び一が竟に  
和睦破きて川中嶋の大合戦となり謙信軍がりの陣備へて信玄の旗本を斬崩きて山本入道々  
鬼をばじめ左間之助信をば諸角昌清等うち死あし大敗軍となる爰に眞田兄弟の西條山に在り

けるが本陣れかたに黒烟り立つを見るよりも些ども擬義せずおし出して筑摩川に向ひまが大  
河がう／＼として水湍矢の如く底さへ知さぬ激流に誰かのひとまこの川を渉るべきものも見  
へたる處に安房守昌幸われ雨の宮の一番乗ぞと呼はりつも川へ馬を懸と乗り入れ逆巻く浪を  
殊どもせせ難くむかひの岸に乗り附け馬よ一息くると見て直江の一陣これを見てその  
敵ぞと先を争うふて突のゝるをえたりや應と昌幸が縦横無尽と血戦す开を昌輝信綱のいろ  
がのまくだ知するにぞ相木とはじめ篋いせ騎主人を打せてのならじとく勢川をおし渡り直  
江山城守が勢み喰付たり穴山入道源登は北條新左衛門に渡り合ひしが北條叶はじと逃出を  
還すまじと追掛一がいかにやしらん源登が馬前足を折り馬するを見て北條えたと取て返  
一哀れむべと源登の新左衛門に打をさりろれ子穴山小助享年わづか十五才の童子ながら取り  
も置ず父の仇新左衛門をうち取たり安房守昌幸の宇佐美駿河守をうち取まど此において  
方いくさを纏め甲越にこそ歸陣一けれ○永録六年二月廿五日真田一徳齊の三男昌幸は群に越  
るる器量をよく識り懇々に遺言あそやうわれ今生の必遺りの先君信虎君におわいませおん  
い／＼や今川より元はるびて替の氏實老体につらく當り奉つり城中もおかすして圓満寺  
に隠居一たまふと聞及べり近きに此地へ迎へ取り奉まつり丁事に御介抱すをへまさて信玄の  
行 狀はさいた道あらせ父子のあひたも父君信虎の事ありて四郎勝頼を愛するとの武田家滅

亡眼前にゆり开も一天下を治そへき人は尾張三河の二國より出づ我いふ處疑がふあかれと  
返そ一も言畢りてぞ卒去せり行年七十四才法号を英譽院殿清雪仁應大居士とぞア一げる○  
昌幸の父の遺言を守りて布下彌四郎を俱一く信虎の隠居する駿府圓満寺に訪たてまつるに信  
虎限りあく喜び本年十三才になる信どらの子上野之助信澄を昌幸にたのみろの身は婿なる今  
出川菊亭大納言の許へ到くとありけるにぞ其意に任せまらせ布下彌四郎を隨がらせ京都  
出立の用意せ一夜今川氏實家臣等に勧められ信虎駿府を辭するににおいくの信玄かあらず駿  
遠れ地を攻むべければ信虎を捕へ置に如かじといふ素より愚將の氏實あれば勧めに隨かひ  
其夜ひそかに圓満寺を襲いせしかども布下彌四郎よく禦ぎて今川勢を斬ちら一信虎を守護な  
して京都にころこのほりけれ○恐るべ一人間の所業ひとつとして報返る一といふとあらず父  
信虎の所行をもめて信玄また四郎勝頼を愛ま兄義信を疎んずるの心發るも父を廢せし報ひな  
るべ一真田昌幸出仕して武田御父子和順のこと諫言しけし信玄怒つて更に用ひず諫言お用  
ひなきにわいての臣の道立じとて切腹せんとまふりしを長坂釣閑まきりにとむ然れども止  
らず既に服を刀をつき立んとぞ信玄遠たしく走り出おし止め詫るばかりに宥めゆも若尾城  
にぞ歸まける程もあさに嫡子よし信謀叛を企て、富曾根長坂等を語らひ今川氏實をもみ方と  
して猶も真出家につかひを遣るに昌幸深く嘆息して二兄に談じて義信に強諫せんと信玄のも

とへ出たるとき義信の謀叛たちまち露顯し方人ありまま誅せらる扱又武田信玄の織田信長と親好を結び上落せんと駿州にうちいで大いに今川を攻惱まし次に徳川家と鋒ささを交へんとろの用意する処に家康使者をもつて和睦を求め武田と手を合せ挿さんで今川氏實がひら籠りたる掛川の城を攻むる氏實恐れて加勢を北條氏康に求ひよつて氏康あれを救ふ時正月にしく寒氣甚だし眞田昌幸陣前に兵糧釜を多くあらべこき酒を入るわつくかんをさせ諸卒に飽酒を飲まよ手足の氷寒をばらはせいでや酒の醒ぬ間に薩た時の敵を攻おとせとて一時おし登りけるが刃寒さつたる北條勢手もあくこの陣を追落され顯たべしる山路をさんぐに敗走しけり○爰に昌幸徳川家康君を評しけるを信玄これを聞て訝かり汝如何にして諸國の大將の氣質をよく知るや昌幸答へくわが父幸隆の遺言よ合戦の肝要はよく諸國の大將の氣質を知り地理をかながへ臨機應變の謀事をおこあふべしと教えられわが臣下に梁田新藏といふものありこきに十六人の勇卒をそえて諸國に廻り地理と大將の氣質行状とを探偵なさし依くろの大將の強弱賢愚眞偽動靜を限じめ知りまた地理も考得るとぞ申しける誠は天下の名將ありとて信玄はとく感佩るし時に昌幸に信州上田の城を與へける○かくと信玄は飽まで今川北條をやぶり心大いに驕慢のあらわれければこれを過失と起すべき兆しなりと昌幸ふかく推慮せしかば一應甲府に歸陣あるべまど勸めけるにより信玄も昌幸が勸めなれば止む

を得ず陣ばらひきて信州上田原まで來りける彼の勝手明神のまへにて落馬しけり國民これを見つ聞つしてろの批評者上街下にかまびそし信玄もこきを聞てはさいた心頭を惱まし木下藤吉郎秀吉はるかにこれを聞てわれ一句をもつて信玄を病ひづかせ呉れんと閑者を甲府へ入れて徘徊歌を國中へ流言おさしむその歌ハ「頼む甲斐さきあつけても誓ひてし勝手は神の名こそをしけれト此歌を謠ひせける信玄この歌を聞きよりたちまち心經病を發し日々に重り眞田昌幸病床に見舞ふて信玄に向ひ君の病根の頼む甲斐なきより發るところなるべしと申しけれを信玄大いにおどろき某方の如何にして是を知るぞ「われ即日秀吉は藤吉郎を遣はしてこの歌の返しを仕まつらん抑々この歌は木下藤吉が仕業なりとて使者をもつて織田の詔にみる木下秀吉へ通したるかれに送るに一首の歌をもつて「難波津の蘆わけ舟におとされてすげの庭鳥立騒ぐあり秀吉こきを見て更だ解せお竹中半兵衛お問へば答へていぬそけの庭鳥どの蛙の事あり恐ろしや昌幸よくも頼む甲斐なきの歌の出所を知つてわが蘆わけ舟をして探るがゆゑに蛙のどる如きさ所爲をどるとも驚くに足らずといひ教えければ秀吉或ひはおどろき或ひは感じ刃手く恐ろしき昌幸よな有斯名士を甲州おかく事の口懐さよやがてわが復臣ととべきよと申されしは是もまた君よく臣を募るとの名言と謂つべし○爰にまゝ信玄小田原を攻んと關東所々へ出戰の体お見せ北條せいを諸方へ出兵させよ原城は無人のところ付



入つてこれを攻先んと計りける是を分むの策といふ眞田昌幸これを諫め、縦令軍器よく圖  
にあたるも君今小田原を陣のあとへ上杉謙信攻入るときは前後に敵をうけて叶ふべしと  
もおもひれず況て北條家に大道寺松田の謀士あきばるか、居ながら攻やぶらるべきぞや  
危うき軍は止爲へといふて退ざさける跡へ倭臣小山田信茂出て小田原せめを信玄に勧め、か  
バ信玄おのが心に叶ふをもつて竟に陣觸をして永祿十三年武田は大軍關東へ雷發せりこれに  
是非なく眞田昌幸へ上杉謙信を防禦として高坂彈正が持かためたる海津の城を赴きけりさて  
信玄は其勢一万八千余騎眞さまに名倉下野守が楯籠るあぐらの城を攻め、おこころこれが先陣は眞  
田の次綱昌輝あり次第とつて細島まで押出し、野陣をはるこの夜北條氏照夜うちまて武田  
せいをおやいに破るこゝあけて銳氣を挫打かれこれより甲府に歸りける○信玄ふゝ、小田  
原に發行し眞田まさ幸あゝの度、從軍せしが大道寺するかの守酒井川のこなた島田村に地雷火  
をしかけたり昌幸天氣の變れるを見て地雷火の伏てあるを知り爰に謀つて小田原の槍兵數百  
人を許し返さまむるといふて彼地雷火の場所を通らしめざるを武田勢と心得大道寺あやまけ  
て味方を散ぐ、たうち殺きたりこれを見るより松田入道その攻掛をといふまゝ、島田村へ政付  
るを、刀金の紋をうつたる旗おし立眞田昌ゆきむらばれ出竟に松田の強兵をうち破り小田原ま  
てぞ取詰たる時に越後の上杉けん信既、北條と親好を結び兩軍一度に起るべし約盟まると

あきと信玄小田原より出戦するとひとまぐ日さへ違へ、志川中嶋まで押出きたる信玄これを聞  
のから今さら昌幸が諫めと用ひざるとを後悔して早速甲府に歸らんとまて三増峠にさし掛  
此路程も昌幸が異見して追打れ用意あぐんをわらずと諫むきまも之とも用ひ、此時に掛ると前  
後より挟んで攻るに信玄驚き昌幸に防戦の策を求めけるも眞田下知して隙間なく手配りま  
て戦ひければ辛くも北條は、大軍を退崩し無事甲府へ歸り、は全く眞田が救助といふべし爰  
に、おいて謙信も元より戦ひを好まざれば越後も、軍しよりけり○此節毎夜、西北の隅にあ  
たりて客星現はれて連日滅せざ、これが爲に世俗の風評まら、くにして善らぬ巷談街説をいひ  
觸ま、とく不吉の事のみあれを一夜信玄眞田昌幸をめまき客星の變やいかにと問ふ昌幸慎  
しんで申しけるやう開も應仁已來うちつゞき天變地妖止むとまきし是や天に詰鑑をえて虚仮  
の妙法にさあらはず上り一天萬乗の君より下り萬民に教る迄彼に肖き此お逆ひ法令いよく  
溢れて天下の諸侯國郡を争ひ東に伐ち西に征ま互ひに數年の怨敵をむとぶ、闘諍少しも止む時  
なく臣は君を恨み子は父を殺し或ひ父を廢し兄弟牆に闘て賊に殺法傳輪して更に絶るとま  
ければ爰をもつて客星あらとれ民にそれ凶相を示すものごと知られたれ世に盛衰盈缺ある  
とは豈花と月との況のみあらんや人間最も興廢一易しそも眼前の例を申さば今川義元昨日ま  
で職三の大守にして英名海内に轟さしも、翻掌間に謀られて桶狭間の草薙と消ぬる現に堅さ

ものは碎々易く剛さものの折れやすし何ぞ智勇と想んで世に慢じ他を侮どるは風の前の燈火  
磐石の下の卵蛋謂つべし斯くの只今至急に用ゆる良策とするの徳川織田とよく交り然して  
上杉北條と戦ひいかでか天下に恐るゝものいはず内を和らげ外を堅ふして國の變の發るを  
見てそを臨機應變にはかり一度にこれを伐ら爲らばかならず天下一統しく四海いつれり武田  
家に歸順せざるものなからんや只かくの如く策略修らま欲けれど骨髄を絞る涙を流し賊心  
つくして諛言せりさきとも信玄はなとだしき疾病有りて我意強く任たるこの覺醒な死の眞の  
將軍の徳あるもの歎竟に此謀めを用ひざりしが卜師を召て客星のとを筮ひしむるに昌幸の壽  
運のさきば信玄つくつく世を觀じてや運阿彌といふ佛師を呼て自己が像を作せたり眞田昌  
幸これを見ておほいに笑ふて申ヌやう此像却つて君の武徳を害るひ取を後世に残すものなり  
謂んや是まで武田家滅はされたる國主城將怨みあるもの倘此國を滅する時ひまの像に對し  
て必ずむらうつり像を碎かん是後世に取を残すの故あらせやと説着られく君臣等しく舌を振  
ふて閉口する信玄聞く作れる像を打碎かんとするを昌幸制止て此像を乞受り火船竅策をそへ  
く不勵の像に作り替たりしとぞ賊に即智の妙と賞しぬ此像今に甲府善光寺にあり○永禄十三  
年九月北條上杉一時に甲府を攻んと出軍す眞田まは幸談者の口を閉して信玄惣せひにて上杉  
に向はしめ自身は長根の副將をえてわづら二千の兵を率ひ北條と對陣 毎夜秘謀の策にて小

田原せとをみまますとよーぎの妙策あり

○第六回北條を敗りて昌幸信玄と同日凱旋並幸村出生

猪も眞田昌幸の五六十の精勇と焚列ね毎夜く北條の陣をひびやかすと既に八日に及びたり  
これが爲に北條せい主従すべて身心疲れ用になつべくも見えざるといふ北條の諸卒の氣服のこ  
どく此彼所に聚まりて睡らふやう毎夜押籠る体のみ見せて唯極明を焚立るのみ味方の陣を誑  
詐すのまれば眞田が偽謀にて全く攻寄るあひあらじと一夜大いに油斷せし陣中上下の將卒  
ともに心を休めて臥たりしを細索斯と報するに昌幸喜び長根肥後守に謀じ合せその身の二  
千の兵を率ひて山方向へは肥後守の正兵を率て押寄たる北條の陣へ近づくと、に鉄はうを  
うち関をつくり陣の四面に柴をやす立あまそまじと攻立けるにぞ大將氏泰 岡 氏忠取ものも  
とりあへず手勢を引て敗走せり眞田の大いに分捕して勝軍をこそ祝しけれ○上杉謙信この事  
を聞きまたも策謀相違せし歎今の武田と對陣ととも詮なればとて一軍一で退陣せしとぞ  
然バ信玄も共引に甲府を指て退陣るし既に甲府の城に近づくとさ相摸口よりうの勢二千もあ  
りと見へるが三ッ騎おー立先に進む勇士どもは手にく斬敵二ツ三つあるひり提げあるひり  
鎗に括りつけ甲府の城にそゝみよるにぞ信玄はじめ諸將もおどろきこの如何にして北條せい  
の斯まで甲州の府城ちかく襲ひ入たるものぞうし眞田のいかに一たりけん昌幸が勝軍と注進

せいの偽りなるかと人々が駭き騒ぐを眞田信綱どもに訝かりわれまゐりて見届来るべしと一騎馬を跳らせ篤と見ていそがしく馳せ戻りて大いに笑ひ止さる信玄のますくいふかり何事かの心堰まで問るゝに信綱のかしこに指さま「うきのみな舎弟昌幸の凱旋したる隊伍にさふらふ旗さし物の此度の分取れ品にゆぞと言上する其うちに昌幸らびに長沼肥後守も御前にまゐり勝利の始末をすあぐるに信玄やとんと喜悅ありひたすら軍功を賞美ありける○時お永録十三年十月上旬上田れゝるに昌幸の妻男子を産めりこれを與三郎と名づく他年左衛門佐幸村と呼ぶるゝもの是なりこの與三郎も先づちて九才になる源次郎と名づくる男子ありける○爰にまゝ小田原城にて氏泰卒して氏政北條の家督より眞田昌幸これを聞くと小田原街なる福田寺の住僧遊阿をもつてはかつて北條武田を和睦なさしむ小田原の諸將これを聞て氏照うち忠大導寺等こゝろく別々にありみな持城に楯籠る昌幸これをもかり鎮め眞に和睦と遂てのち此度の三河を攻めんと元龜元年ささらざ十六日信玄六万の勢をもつて甲府城を雷發なし遠州東城郡ある高天神のゝろを攻むる城主の徳川の御内なる小笠原與八郎氏助なをばすき間なく下知なく防禦すると嚴重ありまゝ鈴木もちこの守仲つながたて籠る足助の城を攻るに軍零敗れをとる眞田昌幸これを聞て大いにおどろきわれ自から攻べしと訓諭を定め手配して遠く足助城の猛將美濃團六を生どつたり城將仲つな深く嘆き降参とべき誓書と入

きて團六をとり返す昌幸これを偽策と知りつゝ團六を返して后布下望月等に策を授け大砲石火矢をもたせ城邊近く埋伏させ翌日城を受とらんとて城外より呼立る仲つなやぐらに現われ出で嘲笑つて渡さばバヌワ城とうち破れと扇をあぐるを暗号として城のかゝへに伏せたる大砲石火矢と一時に放ちて南の櫓をうち崩し忽ち城を陥れたり是にづゝいて淺香井大須田ゝろ八栗のしるを陥し味方が原の一戦に徳川の勇士を多くうち捕り一度敗軍あしたりゝが再び高天神を攻むるに臨んで信玄急病を發し天正元年四月十二日奉したりこの内戦場數度の勝敗のゆゑ遂に長篠の大合戦におよぶこれ勝頼が淺智短慮より起るところなれば眞田兄弟馬場山縣等しばしば諫言するといへども長坂跡部の佞邪誑さる出軍にころ定めたれ○爰にまた岡崎の大須賀五郎左衛門が弟彌十郎の暴戻無慚勇將なりしが主君家康をうらむ勝頼も内通してうらさきりせんとす送る此時まゝ眞田兄弟大いに諫めたれども用ひず出軍に及びたり○この時上田城に昌幸大病にかゝり出陣かあはず時に長子源次郎信幸年十六才あり父に代りて出軍せんことを願ふ昌幸喜んでこれを許し千五百の勢を授けて初陣を賀して出軍なさしむその跡に或日昌幸病氣をこし快よければ杖に縋りて底歩せしに書齋に孫兵衛を讀むものあり雖にやあると聞か見えば與三郎あり今年わづか八才なるよを父心にうち驚き賦ふわが子ありけりとしてまばく感賞したりけり○緒又遠州岡崎には大須賀彌十郎が内通願し兄五郎左

衛門自から舎弟を謀り捕へて磔に罹りしこは時敵軍より織田信長加勢あり酒井左衛門忠次ハ策を設けて蕪の巢のしるを搦手より攻てせめ落と此時の一ばん鎗の大久保彦左衛門なりといふもつとも十六才にて初陣なり

○第七回長篠武田家敗軍諸勇士戦死並昌幸の卓識更に武田家を持堪ゆるの話

さて又長篠の合戦は武田家爰に大敗軍とあり山縣三郎兵衛をはじめとしく内藤修理原隼人土屋右衛門等うち死す中にも異田信綱昌輝兄弟の花よりまき軍まで諸士もろどもに戦死せし此に大將勝頼はさんくになつて敗走する此とき源次郎信幸の長まけ城のおさへよりまが直れ巢落城と聞よりも伯父信綱昌輝を救いんとおし出せば伯父兩人のはや打死の跡あるをもて勝頼と囃で梅光と詮なく取て返せば勝頼はこれも又落失けるにぞ泣きも主人の跡を追慕ふて追來る敵を切はらひし勝よりと助けて甲府に歸陣せし○信又上田の昌幸は五月廿一日の夜「此日甲府おほく打死」長篠の天を見てやるに落星とる事 勝まければ大いた嘆哭を是ぞししく味方の諸將戦死の兆なりとく同月廿三日病中るがら上田を立て甲府に登城を長坂野部大いに阿つて既に打果さんとなしける高坂ら制し詫るにこれを救し頼またまが子源次郎に打向ひなんぢ何ゆゑ伯父信綱昌輝のうち死を余處に身做し敵の首ひとつも捉らすおめくど歸り來るこし救の子はわき持たまわが許しに費せぬぞとて心強くも勤奮を再び持國の策と進上杉と

和睦し北條に好を結ふとを説く俛て勝頼是をうけがひ氏政は妹を請て妻とま又謙信と父子同やうの親をむそび武田の家安穩にまて三年を過しけり○本年天正六年なりが長篠敗軍の汚名を雪がんと異だにの軍略を問ふ昌幸いづく上杉軍をいこさせ織田信長を攻させて然るて武だと北條と合体なし徳川を攻伐のなかか家康を滅すに難からんやとかつ頼はまめ高坂もこの謀斗を善としく昌幸と請ふて謙信を説得るさしめ續ぐせりを踏受させしが嗚呼天あるかな天正六年三月十三日謙信卒して此策あらず買は武田家滅亡の時至れるうな茲に又越後の景虎景勝内亂をおこせしにより勝頼景勝をたすけて景虎を滅ぼせしかば北條氏まはこれに大いに怒り武田家の敵となる此事も昌幸を出しぬいて跡部長坂の謀ふところあり信又昌幸沼津に新城をきつく北條氏政のきを聞て城の成就せざるうちま攻打んと北條陸奥守同ぞく治部少輔に四万余騎を副てゆりはけるが昌幸これを深くと詐誘引せか拵て荒川市下等を埋伏させ追來るをころを鉄砲にて陸奥守の頬をうたれ治部の胸板をうち抜れてともに落馬をまふりたり

○第八回

然ば北條の軍せい四方といへどもその大將打きて争でか一ト支へも耐るべき味方の逃るも敵と心得を横右横に敗走せり異だは味方の一本をも損せず沼津の新城へ引しりぞく信又昌幸

武だ左馬之助を擁かき昌幸の上へに歸城しけり○儲またかつ頼非崎にまろを築きこれを新甲府と稱し昌幸これを強諫せきとも用ひず爰に又た木曾義昌は武だの武運を見限り織信長へ申し出で武だ攻の案内を請ふ中將信忠の七万余騎徳川勢三万五千北條も亦四万五千八方より攻寄たり此において昌幸は勝よりを勸めく上州阿我妻に籠城あきといふに勝頼これに隨ひ然らば其方は上へに歸りて兵糧等の用意せよとあるに喜んで急ぎ立のゑるその跡を小山田信茂來りてわが岩殿城こそ要害みれと勸むるにぞ勝頼爰によこ心變りて新甲府焼拂ひ岩どのを退ぞさしめ淺ましきとゞきなり爰に小山田が勝頼を引出せまはかねて織田家に通じて跡よりを討んとの爲なるをそれとも知らず勝よりの鶴か瀬迄來しのを岩殿の城へ入れず砲殺せんと構をまかば君臣ともに齒ぐみとみせども詮とべなく跡部長坂さへ逃失てりつ頼信勝わつか四十三人となる斯るところに先達て勘氣を受たる小宮山兄弟殊勝にも最期のおん供仕つらんと幕ひ來る茲に勝頼落涙あま弟數馬に勝頼の末子勝千代を託しく上への昌幸が許へ送り嫡子信勝土屋惣藏等四千余人と織信徳川の大軍を抗敵て天目山にて討死にまけり○却説小宮山數馬は勝千代を懐中にして上へを望て久連山の麓まで來るとき河尻せい追來をり如何のせん四邊を見まば辻堂のありけるを幸ひとりの様の下を匿れり此とき眞田昌幸は上田にて兵糧矢玉準備なり頼頼とあが妻へ迎へんと甲府を望して來りしが久連山麓にて川尻せいに行

合より眞田と見て打て掛るを一擧として切崩して追討んとせるところに辻堂の標の下より小宮山はひ出で天目山武田主従のうち死を爰に委しく語り聞えかつ千代託せしことを告ぐれば眞田は父子は一ト度は悲歎え一ト度小山田が逆意を怒り今の甲府にいたるとも詮なくとて此より引りへ一三國嶺に差掛る此絶頂に上杉景勝武田の滅亡を聞かからに甲信の地を掠め取んと出軍きたる小眞田は行台を通らんとすきとも遮支て通さず昌ゆき大いに嘆じけるを幸村この時享年わづかに十四才父の前へ進み出われ一ト言にまて景勝を退けんと穴山岩千代一人を俱一景勝が陣にいたりわが父昌幸今かつ頼の幼君を寄託上へにかへてその君を守育てんとす然るに景かつ無道にも時年景虎と争ふときわが主かつ頼の力を借りて敵一がたき景虎をゆるす一越後を領して安堵とるもみなこれかつ頼君の恩義あらずやその恩義うち忘れ今却りて武だ家の滅亡を幸として甲信の地を掠めんとするのみならず勝千代君の上へへいたるの路を妨げ困難せしむるの何事ぞ武門にありて信義を知らずと争でか一國をもち得べけん預も先主謙信は有斯無道道さるまゝこれにても武家と云るゝ歎と道理を攻て説つけらき上杉主従一ツ句も答ふる詞もかく閉口して只管詫けりしとまことに幸村の論しあくれば景勝天下の胡虜となりつるものを能く訓諭を容られたりと賞嘆あつて引出物を取らせ景勝越後に退陣しけるこれに依て眞田父子無事に時をうち越て備前笠の城に至り此のまた北條は四万五千の勢勦

へて真だ勢を撃んと此にも幸村一ツ策をほどこそその方術と謂ひ北條の謀士松た尾張守の永樂通室の旗印をなかりて其旗を六流れ作りこれを六方へかゝり立て北條の陣へ夜撃せまかば騒動大方あらざる中にも寄手は味方の松だなるぞ松だこそ謀叛人なれと呼ひり一騒動いければ手もなく其陣頭出て小だ原望てぞ逃去りける是より真だ家金銀紋を止て六文銭を旗をふるにぞまたりける此先路の無事にして上田城に立かへり種々鎗城の準備をみとところへ織田徳川北條の三大軍二十四万にて攻よせり然も真だは些とも騒がせ防禦の方策奇々妙々たり初度には釣木の方技をなし二度めよと卯沙の手立をなそこれの鶏卵に熱沙をつめ是を目潰しに投て敵を盲敗せしむる之三度目は越後路へ落ち行ていゝ見せて北條せいの地雷火にて撃ち四度目は寄手竹束にておし寄れば擲炬にてこれを焚く五度めの熱黨をひびせ掛おんどの妙策寄手の廿四万といふも真だ父子が見るとさば蚊虻蟻は群がるにも思ひざりし〇時に四月十一日羽柴秀吉中國より馳戻り織田信長の御陣に着す幸村聞て大いによろこび弄情父子が心中を知るもの秀吉の外にはあらじ念願成就のさきに在りやかて城中に來るべしと待どころに秀吉才君信長に思入てその存意を演べ城中に入來り真だ父子の心底を尋ね問ふ昌幸莞示して答へていふ故主君勝よりの遺命れより七才の幼君勝千代に武だ家を賜ひらば幕下となつて忠勤せんよつて秀吉これを信長に言敷して右府「信公之右大臣」の自筆

に勝千代十五才にあらば甲州のうち十方石を賜與べしまゝ真だには信州五方石を與ふべしと無付をわたされたり此時幸村つくづく秀吉の相と見て天下を領する君なりと覺知せければ秀吉もまた幸村を天下の秀才この幸村の外にはあらじと覺悟めて心中互ひに君臣の約を結びけり尙秀吉に就て乞願を沼出れば城は父昌幸の所築なれば申受たさしを申も秀吉ふれを料理てその義は真だ殿のこころ任せたるべきよしを答へ織田徳川北條の各々自國に班軍しける〇爰に明智光秀本能寺の逆亂どうあれども他種に譲りて記せず〇諸また上州沼田城には武ぶの奸臣竹之市兵衛籠りたり武田家をろびて甲州浪人五千餘人こゝお逃込む真だ父子思慮するに此沼田城には叛賊多くありといへども其中に止まがたくして身を潜むる武士もあらんに是を取捨せんために信長に申受け同年七月沼田を攻て是を乗取り從來昌幸このまろに住と後また信幸に譲りたり〇天正十一年四月羽柴秀吉柴たかつ家を賤が嶽にて結戦に及ぶ此と上に聞へければ援兵さそんばあらじとて信幸幸村の勢三千五百余人木曾街道を強向なま既お野田にいたる城主菅沼新八郎由利鎌之助を以て真だの行軍をくひ留んとし幸村謀つて鎌之助を生捕り降伏せしむ〇さる程に秀吉公の賤が岳大勝利を得て直ちに越前へせめ入るとさ幸村兄弟こゝに馳付き秀吉に援兵して大聖守せめに幸村巧みに筏を作り神邊川をわたし真だの手佐の猛將淺香郷右衛門を生捕り佐よも茲に降歸しければ北國たちまち一圓して秀吉

はじめの歸國とこの時秀吉眞だ信幸を伊豆守になし幸村を左衛門佐に任ぜ○茲にまた織田信雄謀叛をくわく秀吉を亡ぼさんとせ佐々成政これを聞か信雄を援はんと名和新一衛門招たを出奔したるに三千の兵と授けて清洲へむかひし眞だ兄弟のまた秀吉に加勢せんと門名和無理之助ありに三千の兵と授けて清洲へむかひし眞だ兄弟のまた秀吉に加勢せんと出軍なり妙見嶺にて名和が三千余人を行合ふたを开も此時は絶頂播鉢れごとく嶺二ツあり幸村名和を難所おとり込め近藤善之助に撃せたりこの善之助は先年沼た城に在りし近藤善兵衛の子ありしが父を名和無理之助に打せしは不俱哉天の仇なるをもて此所に名和を善之助に打せたるなり

○第二編

信又幸村下知を傳へ此時にて打取し軍兵の懷中を探し佐々木の割符を奪ひとりこもを持く直ちに濃州犬山城に至り夜中おがら佐々成政が援兵ありと偽はり割符を出しければ疑はずして釣索を卸し眞だの勇士穴山小助由利鎌之助布下彌四郎別府わかさ根津新兵衛淺香郷右衛門六人と城中へ入たりよつて直ちに老るゝ火をかけ内外を攻立て老るゝ陷しぬ○眞田この地をかたく立たり信雄の兵を一人も通さず小牧長久手の合戦を秀吉公に心安くしよまへと云送りける○次で又幸村の深尾のとりでを攻落し更ら又北條氏政徳川家よりの頼みにより清洲の信雄に加勢して犬山の眞だを攻んとれしよせたり幸村是を苦もなくやぶり小牧の軍も徳川羽柴

和睦して各々退軍お及びけるがらの先眞だ信幸が本意忠牌のむとめを娶りし例にならふて秀吉公の媒妁にて大谷刑部より隆の女を幸村娶へせんと命せられける○時に天正十二年四月武田勝千代病死し眞だ父子の愁嘆いふばかりなし○然るほどに秀吉公の長曾我部鶴津北條を攻なびり遂に天下を掌握し朝鮮國まで武威軍光を輝かし豊臣の姓を賜り位は關白太政大臣にのり古往今來この公にならふべき將軍もなかりしが嫡子秀次に關白をもつり太閤とあるに及んで身は歡樂もまた極まりなくこそ在したり○茲に豊太閤は寵臣石田治部少輔三成のつら／＼天下興亡盛衰の變りやとささを感じあし天下の一人は天下にあらざるものを我もいかにでり天下を持得るとは難からんやと無涯の望みを興發たり浩る大望を企つるに於いて頼むべき眞田父子あり何卒眞だに親しまんと工夫しけるが昌幸は宇多成親の女を妻としてその妹今尙京都の宇多が家に有りけるを石田三成乞受て妻としければ昌幸とはあひやけ同士にて竟に好の端とありけり○豊太閤の淺井長政の嫡女へのちに淀のといふを愛し文祿元年懐妊あり翌二年八月廿日誕生す秀頼是あり茲に三成淀君にとり入り讒をのまへて遂に關白秀次を高野山へ追登せ淀君所生の秀頼を世つぎとあさしむ或夜幸村天文を見て大いに嘆じて父に語つていひく噫天あるか豊太閤室壽やうやく尽んとして奸臣國家を覬覦とまばくさり嘆じても猶嘆すべきの時至れりと大いに慨嘆せられたり○斯て三成のまどく逆謀をふか

くして上杉の臣直江山城守とはかり會津蒲生に事をおよさせ國改させて上杉景勝を會津に移し百廿万石を領さしめ兎角とるうち慶長三年八月上旬豐太閤御ふ例にく既ち重らせたまふの夕べ五奉行を招き別に徳川前田をめされ秀より十五才にいたらば天下をゆづるべき遺命ありて同年八月十八日六十三才にて薨じたまふ石田三成心中大いに喜び儲ころわが広願の時至れりとその密謀を搦へたる慶長元年前に利家病死して大坂城の後見の徳川との御一人なり○時に三成權威をほしいままにするにより加藤福島等おほいに憎み三成を刑せべき旨徳川どのへ願ひ出る徳川どの深慮おはして石田を居城佐和山へ退隱るさしむ三成これを僥倖としてまづ會津の上杉に謀叛の色をあらわさしむ徳川どのこれを征伐の爲五万八千の勢にて宇都宮まで進發ある直江山城佐和山へ通じけれをスハとて諸國へ觸を出し國司諸大名を煽動すらく此儘にての家康なか／＼天下を秀頼君に渡すべからず速にお徳川をうつて幼君の世にすべければ方々抽んで、努力したまふべしとぞ觸りける石田が逆謀とい秋毫知らざれば毛利親津長曾我部等の謀逆勢十三万八千人同年七月十九日大坂城を馳集まる石田大いによりこび驍み直ちに濃州關がとらに戰場を設けたり○徳川どのの上方の大變を聞き召從軍の諸將にむひおの／＼のみ古太閤受恩の各位なきば大坂に弓ひかれまじ今の家康に味方せよとの申一がたし御心任せらるべしと仰あるに眞田昌幸一番にそ／＼み出それがしい大坂へも徳川どのへ

またがふまじと言切り信幸信尹を殘して上田へころ退去しけれ徳川との本多忠勝をめされ眞が急に退去せしと大坂へ味方するに極まつたり疾追止めよと命するにぞ畏まつて以ト忠勝即事一策を工夫あり沼田城に留守居する信幸の室おそこの方のこれ本多忠勝の女おればこが許へ速急の飛脚をばせて密書をおくり遣りしり○黒田家後藤又兵衛基次智勇全備の名士なきば徳川の武徳を了識し主人に敬へて徳川家に属しむよつて從軍の諸大名みな徳川家に御味方し三成を攻め伐んと國が原におし寄たり

○第九回

信幸の室お墨の方は流石に本多忠勝のむすめ程あつて勇氣凛々として万夫も當りがたき勇女なりしが父の送れる密書のおもひさ夫子信幸徳川家にお味方せしかば身おれども大坂方の昌幸父子を安中にして食とめなば眞ごの家の誓つて大名に取立させんと父の知らせに孝貞は道に賢さおそみ些ども疑氣せぬ根津望月等三百余人を従へて汗馬に鞭うち安中の借關にいたり逆茂木をふつて通路を塞げり斯とも知らぬ眞だ父子二百五十人斗りにて安中の關にかゝり此跡を見て昌幸の大いに怒つて踏破らんいさまくを幸村おがめて別府若狹を遣りして通をせしと官送るおすみの方も大いに怒つて仮令舅が親にもせよ敵味方と隔るうへに決して通をせし叶ひし快立去きと追かへされ右の次第を報せるにぞ幸村再び若狹官つ々がやう／＼に申ぞ



べしとて安中の關へ遣ひしたり別府は再々びおすみの許へ參向し主人の命せに我々の度敵  
味方に別るゝ所存の只管家をおもへばなりその事故の關東が九勝利せば昌幸幸村の助命を乞  
んその爲に借に敵味方との別れたりと偽りければさそがの女性のあさはかにも此謀言に莊さ  
れて故なく關を通りけり〇爰に江戸城の大將軍の徳川大納言秀忠に十三万七千餘騎の軍勢  
にて中仙道を通り信濃路へおし出され關が原に向はるゝを眞〇昌幸安中松之助輕井澤等に皆を  
まへ上田をもつて根城として通すまじと支へたり防戦數度に及ぶうち偽を敗れて安中松之助  
の皆をそて、輕井澤へ引たる跡へ關東せいに陣とらせれば夜敵陣一面に地雷火にてやき立た  
るその四方より伏兵おこりて十三万の大軍も過半の亂殺に及びけき、東軍更ふ評議去る軍を  
轉じて松本口より通らんとぞ茲にも眞〇の猛兵は三國嶺に支へつゝも反間の策をもく矢文を飛  
せく東軍を欺むき三四万の軍せいを慢くと城中へおひき入れ陥穴あて塵したる然もぞも運  
の徳川秀忠阮をのがれて越後路へ逃んとすれば行さきに上杉の紋うつたる旗を數百おし立  
て越後がたの加勢と見せたるこれも眞〇の偽謀ありそを知らざれば秀忠卿進退こゝに窮りぬ  
と大いに嘆息し、まふ跡より馬場物市と名乗かけまつゝくらに追ひ來りて會釋もなく鎗突か  
くる御運つよくも附たる鎗の十且まさよりばつと折れて危急の境をぞ遁れざる茲に近習が  
一ら佐々外記蜀紅のに、さの陣羽織を頂戴しておん身代りに戦死するこの隙は、大將のからく

も虎口を落のびたまへり猶懲すまに上〇のしろを攻たつれば竹箆をおは、時そのうへより熱  
き粥をわびせかけ天窓の熱く堪り侍老足は、こまも止り馬人とも轉げ廻りて道く  
城下を逃のび、見悪しかりける景況あり如何に攻れど些どもひるまぬ上〇の城兵今の東軍  
も攻めぐんでいくさを止めて忙然と遠巻いてを居さりける頃も霜秋のそゑ諸方の田面の早稲  
おく稲あらしまきは赤るゝるに未明に出てその稲を薙取るものゝ寄手の兵卒これを見れを  
上田城中の士卒あるふぞ寄手の大いにうち笑ひ城中最早兵糧乏しくありたるものと見へて未  
だ熟し得ぬ稲を薙ころ哀れあり然りとてやすく、薙とらざるまを寄手を侮ざる倣業をれば退  
散らして彼稻を味方の兵糧に當べきものとやり雄の若武者ども二十三十手をあてせて稻  
薙の士卒を追まろけそでに索を以てたを、吾物顔に夥多しくぞ陣所へ荷ひ容きたり斯  
てその夜の二更のころさきりにゑん筒の氣の發せしが爆としく稻の中より炎もえ出陣所一  
面の火とありけるろの火は光りを相圖として埋伏する眞〇の四方より起り立さんくゝに  
斬たてたる、誰かひひと防戦とべき氣力もあくる逃る足さへ立すして此おも過半のうち死  
せり大將のわづかの近習お扶けられて辛くも安中まで引さまふ是ぞ名高き幸むらが稻薙陣と  
世に其はまれを云傳へたり〇ある夜幸むら天文を見て石〇滅亡を予識し惜いかな豊臣家の廢  
滅近づきたれば徳川天下を、持んとこゝに見さひせ慷慨のきりなりける其日すでに關が原は

合戦の浮城に變心に軍敗れて三成はろびる夜なり○時ふ幸ひら父にひかひ今宵の天文すで  
に石ごも敗滅したれば籠城も是迄に東軍を通しやそべし斯ての兄信幸叔父信尹に懇れを取  
らせずんたあるべからずト別府わかさを密かに信幸の陣につかひし密事を談じて最期に兄  
君ならでこの城をわすすべきとにあらざとてこれを約し若狭の歸城をよつて明日信幸願ふ  
て上ご城の歴をもしつ秀忠の大軍をやすく濱州へ通りまわらせ猶又後をおさへつる後殿な  
して無事に關が原へ着させまわらせり是等の功を御賞美あつて徳川殿より褒賜の品を望む  
べまとい仰せけるたぞ信幸謹んで願とく父昌幸舎弟幸ひらの助命を御救えたまへるべま  
と言上る徳川どの聞し召され信幸の所望神妙なりとて御威あり異議なくこの事御救あり  
ぬ素これ昌幸父子が其始めにして謀り設けし處あり茲に於て信幸信尹は上田に來り相謀りた  
る端末りを父と弟に通告せければ然ばこの地を立退とて昌幸父子の穴山小助別府若狭等の百  
五十人を引連れ紀州九度山へ退隱るし此に安居すると八年に及びぬ慶長六年七月廿四日大谷  
吉隆の女浪江男子を産むこれを大助治幸と名づく○同十一年の春父昌幸遺言きて病死を骸に  
甲冑を着せて紀の川を鎮めたり法考正碧士雪居士行年六十七才これより幸村氣のけとあまて  
山川に瀝とるのみ外に所業もあまた活斗に木綿糸にて紐を製て賣る今の俗に眞田紐あま  
りの紀州和歌山の城主淺野但馬守徳川の命を奉て眞だの購買を窺ひんと山本九兵衛にすい付

る山本深夜に眞だが寝所に潛び入るよ人かぞ猶別室を伺へば晝のやらすにはうつと變り父幸  
村は張貫の砲を夥たたく製と子息大助は六箱三略の巻み眼をさらして電勉頗る睡倦たにあ  
し九兵衛心に驚きながらも主命あれば罷を得まづ大助より殺さんと躍り入りしが苦もなく  
幸村に捉はられ竟に服して臣下となる○然るほどに慶長十二年の豊臣秀頼は十五才の期年に  
至れば大坂の諸將評議して江戸城へ天下引渡しの催促せんと大野修理を遣はしたり然るども  
家康公の一言に伏せられと諸坂せり此返答を聞よりも織田有樂大野道大等騒ぎ立て浪人を抱  
へ兵糧を取入を籠城に準備大方あらず片桐且元これを制それをも更み用ひて此事江戸に聞え  
ければ即事に片桐且元を召て詰問ある且元當利をす聞くに家康公とに機嫌よく時服丕等を  
下され更に秀頼へ婚姻の事を命せらるる孫千姫を嫁したまふ○扱また關東より那智山からび  
に法隆寺に造營を申付らるまた徳川どの上落はつて秀頼にも上落せよと上使あるときに清正  
肥後くま本より來りて秀頼を守護し上落わつて無事に歸城と○茲に片桐且元の那智等々普請  
奉行一が九度山れい妙の地瀧菩薩ありそれを誠心念じけるが夢の告に九度山村に眞だ幸  
むらのあるとを知り且元みづから夜陰獨歩して是を訪問豊家再興を談しるに兩心誠に的中  
けり○扱また大坂には頼み切なる加藤清正毒饅頭にて卒したる告により淀どののはじめ力を落  
まぬ○京都大佛殿造營を命せつけらる片桐奉行にて滿一年を経て大梵鐘まで成就せしが鐘の

銘より亂のさざしとあり片桐且元關東をおもむくこの時幸ひら密かに來り諫め止むれども聞  
ずして駿府にいたり大御所と問答まづくわつて「此に大御所と申すの家康公なり房忠公に  
將軍職をもづる」且元は本多正實宅に休息のうち正實安藤帶刀どもにも美女を本多の女と稱  
し且元に婚姻をすめ反間の策をかまへて大坂君臣の心をうたがりせ覆も三難題を仰せ出さ  
る且元を歸坂あさしむ因て淀君は之め片桐を江戸に召を寄たる逆臣ありと思ひ決せしは是非  
もあき次第なり且元こゝに幸村が諫めを用ひざりしを悔み一ト度は登城せしかど疑ひ解さる  
心退任を申乞ふて邸に歸れども止むるものなき且元の直さま高野山に登らんと其準備する  
爰に木村長門守重成の且元を説かんと邸に來り終夜説き宥むれども聞入を幸ひらを勸め教へ  
て遂に高野におもひさけり重成直み幸村の事を言上して秀頼に十萬石の墨附を書せ明石もん  
部之助を九度山村に遣はしたり明石の熊野詣でにいで立て夜陰に眞が匿寓に到り十萬石の  
墨つきをわたりて秀頼の命を傳へけれの然をどて先年隈く上田城よと伴來りし穴山別府等の  
百五十人を率徒が九度山をおし出し若山城下を通るに及んで淺野これを撃んといふ龜田大  
隅制止合戦の無用あり時にかゝるとさ追打せしと其用意なす眞田勢は餘と松原綱の瀬  
新在家を通りまの邊に追うちおどしの策を残して峠に掛るをいとして龜田が一千餘人追打せし  
かど大砲は「はりぬき」爲に撃立ちと這城逃入り岸和田も無事にて通り大坂城に到着し

て大軍師にぞ命せられたる○大御所に此注進を聞き召され慶長十九年十月十一日駿府と御  
出馬あれはひで忠公も江戸を御出陣ある○大坂城に彼千疊敷にて軍評議に及ぶ小畑勘兵衛  
が關東のまの者あることを知るその夜後藤又兵衛幸むらが許に到り小畑ころ關東の閑者なれ  
打て棄んといへといや／＼渠も十分内通させその背を謀べといへり實に無極の大軍師と謂  
つべー○さてもしろ方防禦の部配りと鳴野口、平野口、玉造口、茶うす山、磯多が崎、伯樂が崎  
本町橋、鯉鰯谷の矢倉、高麗ばま、越の口、長柄等の持場／＼へろれ／＼の隊將を駐賦り南手  
眞だ幸村これを固めたその勢五万八千余人とぞ聞えたる

○第十回

徳川公奈良を退潜並巡見くづき危急却説に眞が幸村の細作のものに南の山手の出敵の神保分  
部一柳の事を聞とり然らば徳川のの泡吹せんと神保分の一柳のはを作り由利淺香ら  
よ分部の旗を持たせ海野別府に神保の旗をあたへ明石籠ふ一柳は旗を與へかの／＼三百  
余人いづれも山手より閑道を越て神保等の陣に出るありまた木村長門守境圍右衛門薄田隼人  
の三千ふは大筒を持たせて徳川を木陣のうしろに向いせしり是當夜に酉の刻とぞ借由利鎌  
之助の神保が陣におまよせ大音に神保長三郎備み聞々なんち先君の大事を受ながら關東にま  
たが亦大逆賊われらの既に分部一柳なるがどもふ心を合せ家康をうち奉る汝も吾らに一味せ

すんば活てい置かじと呼いつゝり神保大いにおどろき旗を見れば分部の紋ありさていわけ部  
ひとつ柳のはや敵となりたるりと騒ぎ立てて又海野のわけ部の陣にいたり前れごとく分部を  
欺む元明石のひとつ柳の陣にいたりて同じく欺むくこれが爲に陣に大騒動となし同立うち  
て戦ひける家康公も大いにおどろきたまひ扱ひ三人變心したりと思し召す諸方の陣に火焚  
るがへりうしろよとの木村塙等大砲うちかけ攻立ければ大將まそく驚轉して逃たまへは眞  
だ幸むら眞さきに追來り大將を突と三四度されども御運願ふつよくさせるがに當らざりし  
さへ一丈余の溝を飛こへ南をさして逃たまひ奈良の南門より入り船屋藤右衛門が三斗桶の中  
に隠れたまふ公よは再びおん勢を纏めて住よに柳陣を定め關東方の分部は大坂城の東陽野  
口にい佐竹上杉本多いづもの守中の島には京極高國森口村には眞山あいの守住よま口には眞  
野長重本庄ぐらには松平元重まき野忠成遠藤常則北玉造ぐらには酒井家次中津村には毛利かけ  
元青沼定秀伊東とけ則本多やす俊奈良海道は秋田城之助うら村小出辰己の角やぐらには仙石  
兵部松平甲斐守同安房守越前中將忠直の一万五千眞田の出丸にむかふより東軍都合二十三万  
八千余騎とぞ○此頃毎夜藤堂その部が陣へ向く藤原より五十挺百挺鉄砲を打出し關東勢を井  
やかと藤堂舟中用意して烟を目的にこき出し藤原のなりを打倒して見れば皆人形なり猶も毎  
夜鉄砲うち出しこれに因て家康公みづかき巡見せんと觸たまふを本多作渡守強諫それども

用いたまひ十一月十九日住よしを發馬ある幸むらこれと聞て吾奇才成就しよりと大いに喜  
び籠笠にて十数砲を持ち鰻谷より舟を出し藤原のうちに匿居たり家康公住言より五六町も  
ゆくに異しや遂離藤原のかん旗雪風に吹折れよりこきを見て大久保忠教馬の善面にすかり諫  
止むときに米倉俊重御名代つかまつらんと願ひ蜀紅の陣羽織と頂戴し大御座のおどく打立  
なし大坂の城際近く進みより其要害を見積り在るところに南の洲崎の藤原に鉄砲の音して怒  
烟のうちに惜むべし米倉いづみの守胸板とうち貫かれ馬より落て死たりけるこれ幸村が十数  
砲めて撃つところあり爰にいよく大將みづから巡見せんと同月廿一日の夜住よしを出渡あり  
伯樂夕瀨積多が越前田うら嶋のあたりに至るとき鉄砲一聲のうちに眞だに埋伏五百余人穴山  
田利別府三好万夫不當の豪けつ兵士奮然と一々突て出るにうち盡きて上を下へと敗走する大  
久保兼松小栗竹腰本多安藤成瀬とう公を援護して住よしを引退ぞく田利鎌之助眞さきに  
追來る小栗竹腰こそを防げ穴山小助藤原より起り公あり馬にも乗取敢ずあねぐばかりに走  
たまふと大久保彦左衛門背に負てまつり住吉さまを馳けるか側らの藤原のなかより幸村一人  
あらいれ出追くると甚だ急なり阿部岩ぶらこゝに遮支てうち死を命は幸村に烈しく追きて危  
急絶命め際にいたり忠教かた急を見て遣きば藤原かく生茂りさるうへに古柳の横さまに江中  
へのり出し其下眞ッ黒に見へけるを土堤の上よりこきと見て是屈竟の匿れとこる柳の下な

る蘆かき分く此裡に匿しまゐらせ忠教は上になりて公を擁護しまゐらせたり幸村こゝに追來り  
的必家康よれ中に匿れたりと柳と足代に蘆の中を歩み出で長鎗もつて蘆のちりを再殺し  
くと突ける程に彦左衛門は公のうへに掩覆さり二ヶ鎗三鎗小鎗のあたり腕あたり或ひは腿  
たふら突きにけきとぞつと堪へて音も立さる實に一生命と謂つべし幸村も儘かに手おた  
へせしとは知れども誰か知らず一ツ忠臣が擁護する真切に感じて鎗をどいめて立歸りぬこ  
した忠教なかりせば殆んど危きおん事ありとろ○阿波の蜂須賀蜂菴父子關東に歸參して住よ  
しの御陣にいり其手始めに虜にさる樋口長三郎をさきに立て馬笈を傳ふて穢多がさきあ  
攻らせたりよの長三郎のえたが崎の守將樋口淡路守が子息あれば父子は情にひかされて長三  
郎と皆のうちへ入れんとする間に蜂と勢多となく皆入り入り樋口父子本馬仁兵衛三將を打  
取り穢多がさきの關東のものどを成ける○松平勘十郎正勝は蜂とかが功名せしを羨やみ鰻谷  
におしよせけるに薄田隼人よく謀つて遂に正勝主従と打とりぬ○石川忠綱の實父大久保忠隣  
が冤の罪にて勘氣の身とぞしを深く嘆させめては吾高名を傲しもせば父の罪を贖ふ助力  
にもあらん乎と思ひ立て九鬼長門守に加勢を乞ひ蜂すか長門守に鰻谷の薄田隼人を壓へさせ  
然して伯樂が淵の皆におし寄たり追手へむのふ精兵は九鬼の加勢に石川の三百餘人をさき加  
へからめ手大將忠綱みづら三百の強兵を率ひ不意に火をうけて襲撃せり鰻谷の薄田隼人は

伯樂が淵を救はんとおし出せし蜂とかがこれと食止るその虚を見とまし關東方の太田鰻坂うさ  
ぎ谷を襲ふたり茶臼山の太田主馬もさき谷を救はんと出軍せしと叶はずして城中へ逃歸  
屈薄は蜂須賀の爲に捕込られ殆んど苦戦するところへ後藤基次これを救ふく平野町の矢倉  
へ引まりぞく石川忠綱よく戦ふて頗る勝利を得て伯樂が淵を陥すにや太田鰻坂もさき谷  
と乗とりける○爰に又關東がさきの向井將監の心さしるる雑兵に美酒佳肴を多くもたせこれを  
賣る商人に打扮せて大坂の艦艦安宅丸に近づらせ寒夜に苦む番兵にまねを買せて懸意を結  
ばせ竟に安宅丸の船底穴を開させ今宵こそ安宅丸を乗とらんとその準備するを九鬼の家老  
九郎兵衛これを知つて安宅丸へ一番に乘入る向井の勢は後れたるを安宅丸を九鬼にとられ向  
井九鬼竟に争論に及びしを神君おあつかひあけて御太刀一ト振ツ、賜はせける此において南  
手は穢多がさき伯らくが淵うなぎ谷の櫓まで攻とられ刺つさる茶臼山安宅丸も關東の有とる  
りければ大坂が大いに銳氣を失きひその上安藤寺町中のまま神さき川の持場に大將みさ城  
中に逃入たりそよ大御所に茶臼山に御陣と居らせ勝軍を祝ふ爲ふこの時越前福井よりか  
ん過分を献上す○眞田幸むら城中より來りこの度の敗北に難し更に後藤木むら等に向ひ各位憂  
ひ爲ふなわれ茶臼山を攻うつて家康の首を見んと瞬理にあり今夜手くぱりして打て出べしと  
いふて退陣せしとき小畑勘兵衛に關東がたへ内通させん爲ありき後藤基次はこれを悟りけれ

とも猶も底意と問極先んと木村長曾我部と三將伴れ幸ひらが許に至り幸村今生の別れなりとて死別れ盃をくみ交合きたる其故は今宵われ一人茶臼山に忍び入り家康を殺すべしよつて各位との對面今を限りなると悍大助を引あはせ後事とのみ別れける扱大助治幸並びに穴山別府寛相木等も遺言なまその夜に成過るころ雑兵具足に陣笠をかふりかの宿沙砲を匿し持茶臼山にいたり本多佐渡守れ下人が提灯をさづさへ来るを見てこれを天の與へと宿沙砲よて是をうち殺しその提灯と割符とを奪ひひとり伊達の陣と欺ひさ通り井伊藤堂の陣をも通り一心寺前に到り同じく割符を出まて加納山村をさむかりおはせ安くと茶臼山の御所に忍び入つて嗣ふたり其夜の越前の寒籠にて諸將と御酒宴ゆりしが子刻過公は雪隠へもかるゝ處を窺ひをましく只一撃と幸村が響出を彈丸ふアツとばかりに轉び爲ふてゝ在合ふ大小名騒動山も崩るゝごとくなり然れども凡人ならざる公に在せば了治の幸村も規ひ損じ耳房打抜のみなり公にはお氣を失ひ爲へども差たるともなく良藥を點じたてまつるこのとき幸村天衣を見るに公の客星爛とどして明かきを借ひ打損じふりと嘆息せり露方には陣門とまめ切り公を打たる曲者を捕へんとまづ外走りの雑兵を殺らば雑兵部屋へ逃込みけるゆゑ幸村もこの内へ亂入せられく在りけるが本多れ合詞のつるといふ事を陣出し是あり得ふりと呼出しの時本多の雑兵にうち交り立出て戦といふ合詞をもめて此場を通を出難退へさその先に重なる

へいの圍みわをけるを人あさところより登りて下を見れば南無三法衛兵多く烽火を焚て看護りぬる情あけきと斬弄んと惡地に飛て下りあり合ふしつを斬殺て眞ぶの出丸を歸りしは危ふかりける舉動なりけり○鴨野口の佐竹義宣ひといくさせんと願ふく大坂がた矢野いづみの守を攻て飯ぶ在馬之助父子ならびに矢野いづみの守の三將を打捕る處へ木村長門守押來り竟に佐竹の先陣を切崩し義宣の本陣に斬入るこの時關東がたの上杉定勝直江山あるは守をして木村が後へをうたしむ重盛らつども騒がす兩大軍にわたる合戦かその勢ひ賊に狂勇無双とぞ見えたる此時後藤又兵衛は本丸に登城し酒色に嬉る秀頼を激まし木村重成がはたらきを見物あれと言上とる因て淀君もるども伏見矢倉み上られ遠目鏡をかけられ鴨野の合戦を幽覽あるこの時木村長門守は佐竹の本ぢんと切崩し正木大膳小山勘兵衛を抗敵にまて戦かひしが電光躍波とふる鎗に正木が眼をつき小山を今福川へうち込めり秀頼櫓のうへよりこれを見て大いに感嘆を處に上杉の大軍木むらがうまろを攻ければア援けよと命する聲に後藤又兵衛うけ爲のりと突然としておし出まこの由を木村に告る重成忝けなしとこれを聞然らば後藤は佐竹を攻て給われれば上杉の新手と引うけ攻付へしと双方へ別れ木村は直江が車掛りのぢんをうち破り大將定勝を泥中へ落せしが情を以て扶け返せり後藤も佐竹勢をさんぐに駈惱まし引返す處へ安藤らの關東せい一万餘騎にて追來れと木村後藤再たび取て返して切崩

一たりこれと後世曾矣一と木むら後藤が二度の駈とぞ賞しける鳴野は合戦關東せい四千八百六十餘人うち死城がた千五百餘人うち死とぞ○茲に徳川殿の一分の働らさを禁じらる同進同退の台命ありて眞田の出丸を取圍むへぢん列の圖は後に出す○最初惣せめせしが敗を取と二度めの十二支の番手攻にせんと其手配りする幸村秘計を廻らし黒門口の守將木村後藤を眞丸へ引わけ關東の間者と知り小幡勘兵衛に黒門口を任せたり木村後藤これを異み問ひけるこれ小畑に茶うす山へ内通させ關東せいを塵しにせる密策ありと申され一扱小幡は黒門口を受とりて其夜茶臼山へ送るやうわき黒門口を受取たれば今夜くる門口より夜打あるべし味方を引導相圖には赤提灯を出して門をひらきて案内すべしと送る幸村のねて潛穿を付おさ小畑が密使を生捕せて幸村の前より引せたり幸村是が密書を見るに察するおとく關東せいを城中へ手引さるる密書なきに直さま淺香郷右衛門を遣ひし小畑勘兵衛を捕來らせ獄下しひき偽使をもつて茶うす山に走らせ今夜黒門口より夜うちあるべしとの相圖のまかしくなりと送る俄て御返書よ今夜子の刻夜うち出べき御返答なれば幸村その準備して待居たり斯とも知らず東軍十餘万は大軍ひそりて黒門口に來り相圖を待つ時に小畑が密書のごとく相圖に赤提灯をいだし門をひらき橋を架渡せば惣ぜい残らずわれ劣らじと押入り見れば城中に敵兵一人もなし情こそ又も幸むらの謀計に陥りたりと驚き引かんとみまけれども無下に押入る

大軍なれば押つ返しつするうちに機關し橋の中より折てみな川中へ落没とる浩るところに眞だの伏兵木むら後藤穴山別府一子大助治幸等の猛將四方より起り立て攻付ければ東軍殆んど塵糠とにせられんと幸むら眞由利淺香等と大御所の御本ぢんを襲撃する神君大ひお仰天し爲ひ大久保安藤成瀬等をお供ふて南に遁れんとすれども味方の大軍に妨げらるて走り得ざれば西をさまて敗走とる幸村はわづか七八騎にて公の跡を追掛る本多佐渡守二千餘騎ふて眞だを隔て防戦とるこの間に公は幸くも落爲ふまたも前路に眞だあり兼松小栗こを禦ぐ又傍道より眞だと名乗りさつて出るを安藤成瀬これを防ぐ今神君一騎にて側田家に逃入りわれを救へと仰せある家主左平太義氣あるものにて公を下家隠しまゐらせ其身はその上に座まゝためらひをる幸村この家に入來り家康を出せと呼はる家主おそれず隠さじといふいかに怖せども在らざといふ幸村その信義に感じて援るの柱に三刀まで斬つけて立去りけり早夜も明たれば幸村敵の大がへとを計り引鉦をうつて入城まけり公に家主左平太に褒美あまた取らせ茶うす山に歸らまけり○徳川公の伊達政宗の勤めふより東軍の備陣十二支に十千をそへて二十二段に勢を番手攻にまける幸村こをを見て大いに喜びこの度こそ相違なく家康の首を見るべし木村後藤大いに驚きその故を問ば幸村答へて豊太閤の御神慮誠に驚感に堪たりこれを見られよと出丸の坤のかたにある被穴を見せこれ豊太閤の設け爲ふ穴なり明日

の東軍にこの出丸を攻させ日暮るを待てこの穴より茶臼山にお一寄て本陣を焼かばいかな  
る關東の大軍も恐れざるべからせと密策をこそ物語りけれ○却説は慶長十九年十二月十一日  
東軍廿万八千余騎廿二段も備へてお一寄せたり依て出丸は三方の木村後藤長曾我部に眞田幸  
村のやぐらに登りて敵の動靜を見守り居り○關東せいはい早朝より眞ごの出丸と無二無三に  
攻着けるが幸村かねて計り設けし事なれば程よくわいらひ次第をばみく一の柵を敷取り色た  
り關東これに勇氣くはしり勇を振ふてまゝも二の柵を乗取る、此戦争を一覽せんと徳川公よ  
の生玉の馬場先に構へたる井樓に登られ眞ご丸を攻るさまを御覽ありしが怪しくも御身体ま  
さりに振へ爲ふもゑ井樓を下りさせ爲ふ其跡へ幸村は預く公の井樓に上る事を語り知つて一  
貫目筒にてうちけるが御運強く下りさせ爲ふ跡るれば旗本衆三人鐵腰にあつて打殺され公に  
は危難を脱れ爲ふ實も危ふさとのみありーがまさる運を爲ふ上お眞だの出丸を二の柵まで乘  
取たると吉澤ありと喜び爲ふ其日も既に暮んときて東軍大いに疲れたるは軍を休んと思へど  
も眞だの衆より計り設けし軍あれば引ての打出く掛退しく戦かひをやめさせざる最はや計り  
の時至れり幸村の別外伏兵等の手配りして一子大助の仕よえなる新將軍の本陣に夜うちせ  
よと口囁き幸村とみづから抜穴より茶臼山に向ふより此日公にのこや日の暮るはやく  
軍を止むべしと五の守差影またる使差をしとく走らせ御心を痛め爲ふ跡に茶臼山御陣のう

しろに火掛りて大音に呼ひるゝを聞ばこれは眞だ左衛門佐幸村あり大將軍のおん首をわたし  
爲へといふに君臣仰天をさるにも大久保彦左衛門は公を馬にのせよてまつり住吉として落  
まらむらす其途中にて聞ば住吉の御陣も眞ご大助夜討をかけて新將軍には落させ爲ふと聞公  
のおん馬を美木の方へ馳せまゐらせ富田まで来て富家の酒屋おと紅屋市左衛門といふ今夜は  
まご夜食を召上らせ彦左衛門扨へおと奈良漬の香の物にて御夜食を献じより幸村の御本陣  
をみぢんにあ一公を追せも行方知れねば城に歸らんと預て作り持たる五の字のさし物を立て  
關東せいの中をおし分て城に向ふておし通り五の字のさし物は茶うす山お使番のまゐりしされ  
ば幸村なりと知らせ通して既に出丸ちかくいゝるとき東軍の茶うす山夜打の注進且は火の手  
を見て肝魂も身も添はすわき先にと退く處を得り設けたる眞ごの伏兵鉄炮うちかけ前後左  
右より攻付るときに幸ひら五の字の差物を六文錢に立直一眞ご左衛門こゝに在りど名乗かり  
南手より攻着ればまゝ出丸の内よりの木村後藤長曾我部のおし出して一時お追打とると尤も  
烈しはじめ廿二万と聞へる關東の大軍も惣敗北となり二万餘人討死したる幸村諸將と評  
議して此度の諸手一同に夜うちを掛んとて其手配りは高麗橋口り中嶋民部本丁橋より赤松の  
つ守堀留より仁木大せん保車口より伊東丹後屋合より旗島玄番出丸より眞だの臣海野六郎  
兵衛伊木七左衛門黒門口より生駒帯刀おのく五百人づ、大小砲百挺所々に伏兵をおさ木村



後藤長七かへは各千五百を率ゐて遊軍より薄だ隼人異だ大助和久半左衛門木村主頭米田監  
物満園左衛門等二手に別れて茶臼山を襲はしめ幸村の三好兄弟三輪根津増等をしたがへ本  
陣のうしろへ廻り兩御所を打取んと構へたり猶空山小助等を襲はせんと準備し既にうち出ん  
とそる時大野長治難えていづく都て夜うちには小勢を宜いと大軍の便あら恐らくは勝利  
からん幸村いふ今夜の軍と一勝せんべわれ大野の僕とあらんもし勝利を得ば長治切腹をべ  
と賭をふして出戦せり幸ひら果して圖のごとく大いに勝て敵の諸將を多くうち取り兩御所に  
も最危ふく逃たまふ此後大御所に幸ひらの軍配を大いに恐れ一度と常光院(淀君の妹  
にて關東附之)阿茶の局をもつて和を談じけれども淀君の返答勇烈にして和議とせず次  
に京都所司代より奏して勅使をもつて和睦を取結ばんと十二月十五日勅使庭田大納言兼秀卿  
柳原資義卿茶うそ山にいたり次に城中に到りたまふて双方契約をなす秀頼に城の惣堀を  
埋むると家康に和州紀州を大坂へわたさざとを期盟ありて和睦となる此時木村長門守重  
成の大御所の御判元見届けとして茶臼山の御陣にいさる重成その日の打扮の黒羽二重の小袖  
に桐の紋の麻上下供八十人同役の郡主馬あり既に生玉に到り板くら安部百人にて出迎ふ藤堂  
の陣前にて下馬あるべしといふ木村重成大音聲に今日の秀頼公の上使なり河ぞ下馬いたべ  
と呼いつて通り井伊越前家の前をも右のごとく呼はつて通りぬけ御本陣にて下馬一立關より

上りもく役人ども立塞がつて刀を殘されよといふ木村大音に陣中の禮義なりと申すて諸  
大將の並列ぶなりを張賢して刀もあられとうち通り御廣間にまゐると酒井家次聲をかけ御  
出座の間もなさぞ刀を次に置たまへといへども木村の陣中の上使にて軍令を用ゆるなり貴所  
違も已後のこれを見習ふべしと更に聞入れず刀を持って着座なす程なく大御所御着座あり郡主  
馬の平伏をきども木村は更に手も下げず公命に木村駿府以來久しぶりあり父常陸之助よりの  
馴染別條あきかありまかば木村威儀をたし秀頼公の上使なりわたくしの挨拶の致さずと  
いひけるにぞ列座の諸侯手に汗を握るばかりあり然れども寛仁大度の徳川公少も構ひなく  
尤の難なりとして手箱を取寄せ書を出して木村に渡さすまふ長門守を拜見するに起  
請の事一此度勅命によつて双方和睦せしむるゝとして大坂外曲輪破却し惣堀を埋むる事  
然る上此已後如才あるまじ尤も以後干戈を動かさしむ方違勅なるべきものありとありしかば  
木村の心の中に和睦調はざるを喜こび郡主馬に向ひいさ立れよとて刀引提げ左右に講して斯  
のごとき御書面の持返られずと御前を立んと列座の面々珍事ごと各刀に手を掛て御  
左右いかにと扣へたるを御覽じて木村鎮まるべしわれ年老て忘れたり夫の下書あり本陣は是  
なりと興より持出て木村お渡す木村おし較さひらさ見るに敬つて白と起誓文ひとつ此度勅命  
によつて双方和睦せしむる後の別意なく氷魚の交り致すべき事一秀頼惣堀を埋め此方より和

州紀州を來正月中に大坂へ相渡すべき事一血判誓紙相濟次第陣拂ひして大和路へ引取へき事  
右の條々相背くに於ては何方にても干戈を動かし候方の神符を裝り違勅あるべきものあり木  
村重成の拜見し終つて宜敷いとして本多に渡す本多公へ奉まつる公血判したまひ木むらへ抄す  
木村血判を火鉢の火ふ翳え試て首にかけたる錦の袋に納め始めて其身を譲り下り平伏して本  
多上野之助に向ひまことに御和睦相とひのひ恐覺至極おの／＼方にも此うへの底意なく御意  
あるべし先にそれがし無禮の事ども恐れ入りたてまつる是も忠義を心かけたいこと處なりと  
て挨拶なく退出するありさす勇氣凛々として一騎當千とも謂つべき英けつの氣あられ大御  
所をばじめ感せぬものこそなかりけれ（木村むらが火鉢に怒紙をかざし見たるは若紅きせを  
血にせしやと試きたるなり紅から火にかざせを青くあるものなり○然れば和義とのふ  
て兼成そでに命をささるものにして茶うす山御陣より木村が云儘に指書をも渡されけれ  
ハ謀斗もさす本意なく立返りてうき嘆息しが又一策を工夫出たり爰阿部加賀守の誓  
武田の臣にきて今の松平忠昌の許にあり幸村が父との朋黨あるをもりて幸村はたき旨あり  
とて加賀守に對面を願ふ公御思慮めつてこれ雇竟のとなり幸村さへ打殺さば大坂落城手との  
へすうらなれば幸村と加賀守が對面の時を見とす伏兵をおさ鉄砲よりうち取へしと其准  
備をなして相待けり幸村か終て松平忠昌に穴小助幸村かりといひ懸して見せ置るることあ

れバ穴山小助の密意を語り幸村なりとして阿部加賀守が許へ行しめ種々古今の秘事あを談  
話きて時を移したり忠昌これを伺ひ見るに週日値たる幸村なればすこや打捕れと下知する折  
り茶臼山の御陣より急使來りて幸村を打べからす台命を傳へければ各位おどろけ手を下  
さき穴山は夫ども知らぬば日の暮るまで談話に及べ本意を還るに至らざれば朽爛くの思へ  
ども詮方なけきばすこく出丸へ還りける松平忠昌は大御所にこそを問たてまつる公宣ふ願  
よおろろまら幸村ありこそころ渠が密斗たく我に贖幸村を殺させ違勅罪を犯させ軍を起さん  
手術なり阿部が許へ行たる幸村は實にあらむ贖者なりとて命せける○兩御所に茶うす山陣  
拂ひおひして勅使と共に京都まで引どり爲ふ○却説幸村の木村と共に秀頼に申きて厚の和田  
和歌山こほり山尼崎高槻三田等を攻取ど乞ふよと君道大等大いにさへ違勅ありといひひ  
がめて許さかりければ幸村これより登城せず秀頼愛ひく興田丸へも訪らふ幸むら喜んで出  
迎へとに待遇していふやうよと淀の母にしてしんあることを説諭し父の家を絶たまふは最  
も不孝至極ある道を説て母をそと薩摩へ落たまふとをすむ流も島津家より密書にせいし  
よをまで添てお迎ひの船も兵庫まで來れるなれば事の期に及ば薩摩へ退去あるべいとぞ勅  
めける○淀君の三女よ青木伊藤をそへて駿府へ遣りて紀州和州の兩國を早速か敷しあるやう  
申出れども叶はせ別て青木にみつゝ命せて先年大坂へ御婚姻ありし千姫を盗み出さ來らば

二十万石を與へんとある青木これをお受申して歸坂せり幸村はやくもこれを悟り青木に千姫の番を申付たり其上幸村は臣笈川八内に密謀を含ませく青木が味方ふ付させたり青木はこれを喜こび八内に駿府公の御内意をまで申聞て味方にしたりと心を容せしは淺間しき心にぞある○叔父大野主馬の強て軍をいざせて塙圍右衛門昌部米田を討たせり○それに引のへ幸村の奇兵を用ひて南方岸の和田等をうち破り淺野等の關東せいを紀州わか山まで追退るけ敷々にうち惱ませたり○また西國の關東方を一つ攻せんと大助を大將として尼が崎まで攻つめさるる此一ツ戦には百姓長今里村の三右衛門上谷村の庄右衛門の先年豊太閤の鴻恩を受たる者ある此度こそ其恩澤を報せんと千餘人の田夫をかたらひ合西國勢の水くみ米かしき等み入り込み鎗刀弓鉄砲を損なひ或の陣に火をかけおとして妨げられ一ツ戦すると能ずもろくも大敗に及びけり○元和元年四月廿五日東軍ふたゝび大坂を攻んと江戸城駿府を雷發ある一隊は結城少將と大將として七万余騎大和國國府峠に向われ一隊は藤堂等將として同く七万志貴山より進み一隊は小笠原等の七万くりがら峠より進み扱て大御所ふの河洲道明寺を本陣とそ○爰に最初の合戦は後藤が手にして奥羽の勢を散りに聲惱まし國府峠にて上杉勢を六度まで突崩す是を後藤の六度鎗といふ○木村重成の此度こそ最期の軍なれば花と敷戦はんと五行五色に隊伍れて井伊の陣勢を揉破り伊井直孝が本陣に突入り岡部十郎左衛門と戦ひ藤田能登

守を打取る然れども從士悉く討死せけりば重成今は是までなりとて安藤長三郎といふ者に首を與へて討死せよとぞ○後藤基次は國松君を迎へ取んか爲め紀州新宮へ行く所とよまて基次の功臣片山勘兵衛ならびに山田幸右衛門を殘と別くも山田を基次の打粉にさせく後藤の影武者とぞ斯て片山勘兵衛へ松倉豊後守を討ち遠藤武者之助をうつ繼いで美少年のうつく掛るを須臾あいらい捉えく討んとおしけるが其もの、敵を見れば武者之助と同じく三ツ龜甲なりその名を問へば遠藤武者之助一子龜之助なりといふ然らむれこそ汝ぢが父の敵なり即討ちしと片山みづから龜之助が太刀を持添え勘兵衛への脇腹へ突込み打れり又山田幸右衛門の敵十一騎うち取り後藤隱岐守基次と名乗片倉が鉄炮に胸を打る然どもひるまを戦まが今の味方悉く打れ孝右衛門一人となりしかば腹切て死なんとする時一通れ書を黒田家へ殘したり是の故主あまなるへし○薄田隼人も譽田山より切て出酒井蜂須賀の勢を切崩す討死す○長曾かへは大御所を手強くなやまま公に雨あびく馬にべり落馬あつて泥まみれにありしが左衛門扶けやして辛くも豊浦村の百姓喜六が宅に入り何り着替をと合する時喜六木綿を新しく縫ふて奉つる○木村薄田等討死を聞て幸村父子聲を放ちて大に嘆き天我兩腕を落せり斯くは止まじ然りながら最期の大合戦をきて關東人の肝を取折ぎ呉れんぞと兼て笈川八内をもめて謀りおひる千姫君を盗み出させ然して策を搦へんと八内密告し伏せし等の手配りせり爰

に幸村が謀る所の偏ふ公を誑誘て平野へ入れ奉つらん事を專一に計らはん爲す。辛苦せり扱も此度奇謀に用ゆる一箇の將は三好入道爲三かきばこれを平野の辻堂ある道心坊主に出立せ此又秘密の策を構へたり公には斯とも一るまめさぞ潜入の根柢來れ雷光壬生青鬼といふものを遣ひして平野街の体を見せ又安藤治左衛門として物見さるるに旗のみ索からげよて立てありと敵一人もなく只辻堂に破鉦をあらして八十をかりの手足も叶ぬ坊主一人をり此者は問へば城兵の何か大切き女を失ふたりとて是は千姫のとこ一騒ぎ來りしがその城兵の爲に休もさかぬ様に去れり何とぞ救ひ爲へと泣にぞ安藤士卒をして年寄坊主を戸板に乗せて道明寺へおくり來る公これを御覽あり佐久間肥後守へ御預けあなる。○去程に五月二日道明寺を御出陣あり惣軍十三万餘騎公には平野町に入り辻堂の側に御本陣を居られや午の刻過る頃されば公にの堂のかたのらを御覽あるにかまど焚燬したる楢榎火ありおれにて湯と沸し湯漬を出せど命せありて堂内を見れば地蔵尊を安置すアラ尊やこの地の穢を忍びずとて十歩ばかり立退爲ふに怖まや地中どろくどろく響きたり千万の霹靂地の底より沸いたすがとどく雲白の玉とび出して一天眞黒となり看るく地蔵堂も虚空に突上られ石の地蔵も微塵になつて碎け散り大地八裂して公の側まで火燃はるる彦左衛門公を小脇にかへ東をさしく懸走と是ぞ眞田幸村が心機とつくして作設けたる飛電火といふものにて火入いくつともあく大虚に飛あがり車輪のごとくうち轉ぐ火の雨を降えたり諸軍勢いふも更あま公にも彦左衛門にも甲冑落の毛より髪髪まで火もえ着り焦爛るゝ然るに御運つよくも逃ゆく先に大沼ありこれへ飛込み泥水をそゝぎ掛奉つり火を消たり猶も大久保永井横田等公を援けて井路川に跳入り水を呑息をつぎけるが公には人心地なかりけり活る火攻にも御命を損じ爲ぬは誠にふしぎの神壽と謂ふべし伊達政宗これを見認め扶け出たてまつり龜井村へ退ぞく爰にも眞田の伏せいありて打起ければ道明寺をさして落たまふに諸所お伏兵かこり立旗本の諸將おびさしく討死せるこの間に加勢伊達井伊藤堂の軍せい次第に馳りき公を擁護し引しりぞく。○扱また笈川八内の平野の火の手を見ると等々く時分りよまど青木民部を一刀に切殺し山田頼母をも打て猶奥かかく走り入り千姫をも討んとせまが本多外紀がねん供に之危急をのがれ落たり一笈川が從者十二人の諸所に火をかけ切て廻る辻堂坊主の三好爲三も番兵をきり殺し笈川と同時に切て出て道明寺留守居の兵と奮戦せり此時公にの敵はや道明寺を襲ふと見て住よへ落たまふ忠教五六十騎にて吾彦村にかゝるこの所の伊藤丹後守が埋伏して公を打んと種所に淺井周防閩をつくりて公を逃したてまつる此周防守は秀頼の叔父なるが關東へ内通して秀頼と毒殺せんと計る幸村その密書を得て大いお嘆息しわきいか程心を碎くとも豊臣家の運の傾むくとある是非もなしと覺悟をける。○此ふ幸村七人の影武者を仕立る三浦新兵衛山田舎人木村助五郎近藤

輪のごとくうち轉ぐ火の雨を降えたり諸軍勢いふも更あま公にも彦左衛門にも甲冑落の毛より髪髪まで火もえ着り焦爛るゝ然るに御運つよくも逃ゆく先に大沼ありこれへ飛込み泥水をそゝぎ掛奉つり火を消たり猶も大久保永井横田等公を援けて井路川に跳入り水を呑息をつぎけるが公には人心地なかりけり活る火攻にも御命を損じ爲ぬは誠にふしぎの神壽と謂ふべし伊達政宗これを見認め扶け出たてまつり龜井村へ退ぞく爰にも眞田の伏せいありて打起ければ道明寺をさして落たまふに諸所お伏兵かこり立旗本の諸將おびさしく討死せるこの間に加勢伊達井伊藤堂の軍せい次第に馳りき公を擁護し引しりぞく。○扱また笈川八内の平野の火の手を見ると等々く時分りよまど青木民部を一刀に切殺し山田頼母をも打て猶奥かかく走り入り千姫をも討んとせまが本多外紀がねん供に之危急をのがれ落たり一笈川が從者十二人の諸所に火をかけ切て廻る辻堂坊主の三好爲三も番兵をきり殺し笈川と同時に切て出て道明寺留守居の兵と奮戦せり此時公にの敵はや道明寺を襲ふと見て住よへ落たまふ忠教五六十騎にて吾彦村にかゝるこの所の伊藤丹後守が埋伏して公を打んと種所に淺井周防閩をつくりて公を逃したてまつる此周防守は秀頼の叔父なるが關東へ内通して秀頼と毒殺せんと計る幸村その密書を得て大いお嘆息しわきいか程心を碎くとも豊臣家の運の傾むくとある是非もなしと覺悟をける。○此ふ幸村七人の影武者を仕立る三浦新兵衛山田舎人木村助五郎近藤

團右衛門林源四郎鳴海吉右衛門望月六郎兵衛あり○扱また幸むらの淺井周防が三族を斬盡し  
淀君を詰の丸へ押籠たり○大御所三日の間泉州さかひの町人の宅に隠れて在せしが新將軍ふ  
も河内の若江へ御歸陣あり公にも道朋寺へお歸りある途中かの七人の影武者おれく二百の  
強兵に五十目砲を持せ七ヶ所に埋伏させおとり立ち新將軍を攻付りーに本多小笠原相馬上  
杉佐竹等よく防戦せし七將も戦ひ屈して火中に入て死す畢ぬ○爰に城がさある越前浪人御宿  
勘兵衛捕はれて徳川公の前に出公問ふて宣ひく勘兵衛は何の爲に捕はれたるや勘兵衛答へて  
曰く眞田幸ひら戦死せり深交の友なれの其首を申受て弔ひたさ旨を言上と公神妙なりとて七  
ツの首を出しく見分よとある勘兵衛近藤が首を見て落涙なした治の眞田幸村にも淀君の奸を  
憎て斯なり果にけりと悲嘆よくれ首を申受て御前を退き近邊の寺に到り僧に頼て之を葬ふり  
塔婆に取つき割腹して相果たり公の細さくこれを見届け立歸りて言上せしるば公にも實ふ幸  
村が戦死せしと思ひ召ける○今のはや幸村在されば大坂城を惣攻にせよとて元和元年五月四  
日東軍廿三万余騎の軍初めに小笠原信濃守本多出雲守この二將の心中不平のとありて兩  
人預て盟約なしうち死せんと一番に討て出信濃守の伊藤丹後守が手にうち死し本多の荒川と  
戦ふてありける處を大御所早くも悟らせたまふて本多の呼返させたまふ○四日終日戦ひくら  
えて幸村その夜平野夜撃し銅蓮火砲を大虚に飛えて關東せいを惱ましり○此の後藤基次の

四月下旬國府の戰場を山田幸右衛門に委託熊野新宮に赴むる國松君ならひお母公れおん供し  
て四日の夜急ぎ歸り半田山に來りーとさ前路の人聲聞えけりバ妨たげらきてはならじと思ひ  
路傍の橋を鎗にて突くこを此かおは大御所平野の夜打を脱去く此まで落脱爲ひしが俱に殺れ  
果たれバ寺の無道かおを取寄せこれお乗り來せしを後藤計らず突たりしが彦左衛門の鐵さす  
その鎗切折り抑この鎗は三條古鍛冶の名作とぞ○幸ひらは基次の鎗を奪てび然バ明  
の順風を得て薩州へおん供せしと後藤諸とも落支度と○明れバ五日此度こそ穴山小助が功  
を立べき時至れりと眞田に達ぬ打拵して天王寺南の門に六文鎗の旗をおし立たり爰に本多  
出雲守忠朝(忠勝の子)は今日こそ潔白うち死せんと第一番に討て出で眞田を目的ておし寄る  
時に眞田の陣中よりのしこんぶをろへ銚子土器を持來り幸ひら今日打死の意を演べて願ふは  
名高き本多どのと打合あてうち死せんことを本意おれ先刻よりの御働さ目覺しくは御取巻を慰  
めんふめ一献さこま召せといふ忠朝喜こんで三献受てうち合ふたり幸むら暫らく取かひ引  
いて逃去古井の中へ落る忠朝駈來りて古井を聞くを眞田下よと飛ついで突進し首を取て引  
かへす穴山小助手早く忠朝は甲冑を著し本多忠朝ころ眞田幸村をうち捉たりと呼りりく御  
本陣お走り入りその儘眞田幸村と名乗り梶西尾遠山をうち取り猶越前せいに渡り血戦し原陣  
人に渡り合ひ逐ふうち死たりけり○増田兵太夫は一子兵助は大助治幸の影武者として遺明

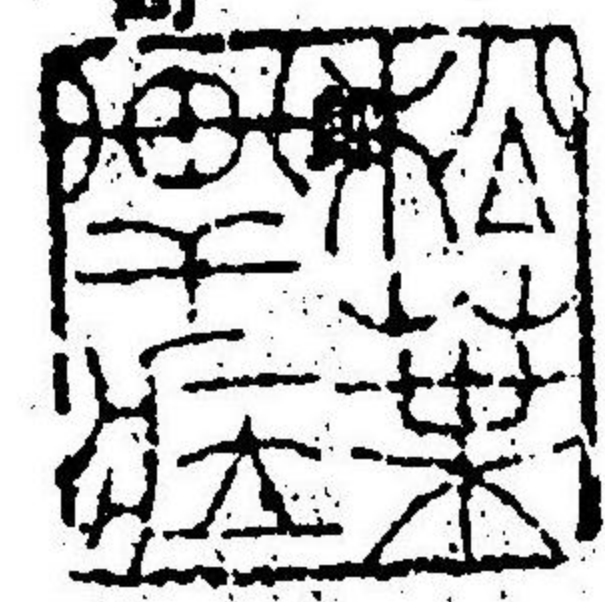
寺の御陣に夜討し毒砲をうつく大軍を惱まし兩御所を退らしめてまつり一ツの岡に上り陣  
 腹して首を奥田河内守に渡せしとぞ○叔幸村父子後隊等百五十人は秀頼國松君に供して六  
 日れ夜丑三頃抜穴より出で奥田にて薩州の三士これを迎へて兵庫より出帆しける○大坂落城  
 の五月八日ありといふ穴賢

明治十六年 月 日 御届  
 同 月 日 出版 定價十五錢

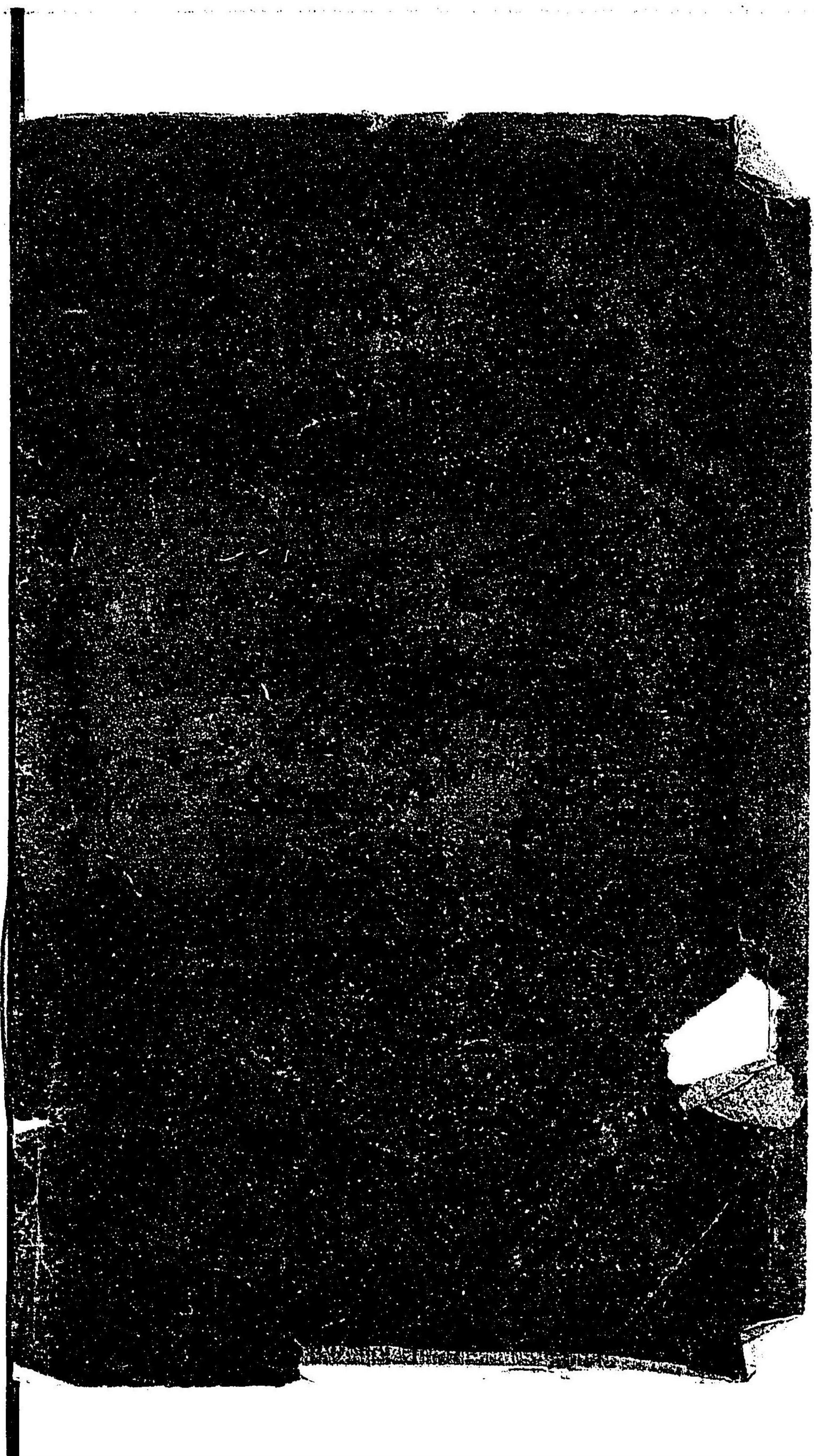
編輯兼出版人

長野縣平民 西澤喜太

信濃國上水内郡長野町  
 八百六十四番地



印刷 長野西町新道 西澤活版所



特43

396

205064-000-8

特43-396

繪本真田三代記

西沢 喜太郎/編

M16

EDV-0057

